日本の貝殻

岩波写真文庫　99

貝類のコレクション

はじめに

人は自然に対する驚異の心を失っていすぎる。子供のころ海は限りない興味の宝庫であった。砂の間に見出す無数の貝殻は豊かな美しい夢を描かせた。多くの人はその思い出をもっているだろう。今はそういう興味を失った人たちももう一度この本によって、自然の神祕を探ってみるがよい。子供たちのためには、海で遊ぶ夏の一日をこの本はさらに豊かにするであろう。日本は海の國であるだけに、世界でも有数の貝類多産國である。その数は記録されただけでも五千種に上っている。この本ではそれを全部扱うことはもとよりできないので、ありふれたもの、珍らしいもの、有名なものを選んだ。ありふれたもののなかにも、いかに自然の美しさがひそんでいるかを読者は見出されるだろう。

目　次

定価100円 1953年 9月25日 第1刷発行 1957年 3月10日 第3刷発行 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店

この本に載っている貝の分類表 （科別番号一覧表）

この表のそれぞれの科ごとに頁数，写眞番号を逆にたどれば，その科に属する種類と特徴とを知ることができる．

太字は頁数，細字は写眞番号，*印の頁数は説明があることを示す

×印は淡水にすむ貝　*印は陸にすむ貝　△印は空氣を呼吸するが海岸にしかいない貝

A ひざらがい綱
（小判型；背に8枚の殼がある，*60）
1 ひざらがい科(61-6)

B 腹足綱（ふくそくこう）
（卷貝類，腹の下面が足になる，*6）
I **前鰓亞綱**（ぜんさいあこう）（普通の卷貝類，心臟の前に鰓がある）
a **原始腹足目**（げんしふくそくもく）
2 おきなえびす科(*38, 39-6)
3 みみがい科(4-5; *30-1, 7, 8, 45-9)
4 すかしがい科(21-15; 63-5)
5 つたのは科(4-6; 22-1)
6 うのあし科(22-3, 5; 48-5)
7 にしきうず科(4-3, 13-5; 17-3; 20-5, 6, 7; 24-2; 27-10; 30-5; 39-7, 8; *44-4)
8 かたべがい科(31-11)
9 りゅうてん科(4-2; 11-11; 13-8; 21-10; 23-9; *30-3, 10; 32-中上, 中下; 38-2, 9; 44-3; 64)
10 あまおぶね科(12-1; 23-8; 43-4; *53-6)
*11 やまきさご科(*57-7, 8)
b **中腹足目**（ちゅうふくそくもく）
*12 やまたにし科(*57-4, 5; 58-2. 3, 13)
×13 たにし科(12-6; *52-4, 5; *55-11)
14 たまきび科(*22-13)
×15 まめたにし科(*53-3)
16 いそつぼ科(8-2; 21-16)
17 いそまいまい科(21-14)
18 くるまがい科(15-8; 38-3)
19 へびがい科(5-13; 63-11)
×20 かわにな科(53-8; 55-8)
21 うみにな科(26-6; *53-9)
22 かにもりがい科(19-5; 23-12; 30-2; *44-11)
23 みつくちきりおれ科(21-12)
24 いとかけがい科(表紙右下)
25 あさがおがい科(*51-3)
26 きくすずめ科(*30-6)
27 ひげまきなわぼら科(50-1)
28 かりばがさ科(20-1, 2; 48-1, 4)
29 くまさかがい科(*34-11; *38-1, 4)
30 すいしょうがい科(*34-3, 6; *38-10; *44-2, 5)
31 たまがい科(*18-14, 43-3)
32 ざくろがい科(17-5)
33 うみうさぎ科(表紙右上; *40-6)
34 たからがい科(*14-5, 7, 11; 20-3, 4; 33-左下; *40-1; *43-6～10)
35 とうかむり科(14-10; 40-5; 44-1)
36 ふじつがい科(2-上, 下; 5-1; 14-2, 4; *34-5; *40-10; *44-7, 10, 12)
37 おきにし科(30-12)
38 やつしろがい科(35-12)
39 びわがい科(8-3; 35-8)
c **新腹足目**（しんふくそくもく）
40 あっきがい科(表紙左上; 8-4, 5; 15-12, 13; 23-11; 29-4; 31-9; 32-左上, 左下, 右上; *34-1; 40-8, 12; 45-6, 8)
41 みずすい科(表紙中上; 41-9; 42-1)
42 たもとがい科(10-5; 20-8, 13)
43 えぞばい科(5-10; 8-1; 13-7; 16-1; 29-6; 34-2; 40-7; 48-6～10)
44 てんぐにし科(*62-3)
45 おりいれようばい科(19-4; 21-11; 26-7)
46 いとまきぼら科(5-11)
47 いとぐるま科(41-11)
48 まくらがい科(4-7; 11-8; 40-2; 43-5; 63-8)
49 ふでがい科(15-15; 39-13; 46-3)
50 おにこぶし科(47-7)
51 しょくこうら科(47-13)
52 ひたちおび科(40-3; 47-10; *62-7, 9)
53 くだまきがい科(表紙左下; 15-14; 30-4; 34-4; 38-11; *48-11)
54 いもがい科(5-9; 10-6, 9; 42-2; *46-8, 11, 14)
55 たけのこがい科(5-12; 16-2; 19-6; 39-15; 46-4)
II **後鰓亞綱**（こうさいあこう）（うみうしの類，心臟の後に鰓があり，大多数の種類では殼が退化していて無い，*60）
56 みずがい科(11-7, 10; *40-4)
57 たまごがい科(4-8)
58 かめがい科(*51-4～6)
59 ドーリス科(*60-4)
III **有肺亞綱**（ゆうはいあこう）（かたつむりの類，肺で空氣を呼吸し，陸にすむ種類が多い，*56, *57）
△60 からまつがい科(*22-2, 4)
×61 ひらまきがい科(4-4, *53, 54-1)
×62 ものあらがい科(54-2, 4)
*63 きばさなぎがい科(59-14)
*64 きせるもどき科(59-10)
*65 きせるがい科(*14-1, 3, 9; 56-2, 10; 59-9, 11)
*66 なたねがい科(58-5)
*67 なめくじ科(*60-3)
*68 べっこうまいまい科(58-7)
*69 こしだかまいまい科(57-11)
*70 まいまい科(*57-3, 6, 9; *58-1, 4, 8, 15, 16; *62-1, 10)
*71 たわらがい科(59-12)

C 掘足綱（くっそくこう）
（角貝類，足で砂泥を掘る，*7）
72 つのがい科(*6-15; 19-7; 39-12, 14, 16)

D 斧足綱（ふそくこう）
（二枚貝類，斧形の足をもつ）
a **多歯目**（たしもく）（蝶番に櫛狀の歯がある，13-11）
73 くるみがい科(9-10; 36-4)
74 ちりろうばい科(19-15)
75 ふねがい科(6-3; 13-11; 24-1; *28-7; *36-1)
76 たまきがい科(10-3)
b **不等筋目**（ふとうきんもく）（片方の貝柱が大きい）
77 いがい科(6-5; *22-7; *27-4)
78 あおりがい科(38-5)
79 うぐいすがい科(6-4; *28-1)
80 はぼうきがい科(*28-5)
81 いたやがい科(6-6; 9-11; 13-12; 14-6; 35-9; *36-5～8; *48; 50-2)
82 うみぎく科(8-6; 21-9)
83 みのがい科(6-7; 8-9; 37-9; 47-12)
84 なみまがしわ科(*27-8)
85 いたぼがき科(7-14; 13-9; *23-10; *28-2, 3; 46-1)
c **眞弁鰓目**（しんべんさいもく）
×86 かわしんじゅがい科(6-2; *53-1, 10; *55-3, 5, 7, 10)
87 とまやがい科(*22-6)
×88 しじみ科(*53-2, 7; 55-6, 9)
89 こうほねがい科(36-2)
90 ふながたがい科(*27-12)
91 かぶらつきがい科(7-10)
92 きくざるがい科(62-2)
93 ざるがい科(表紙右中; 7-11; 12-3; *28; *34-7; 36-10; *46-6, 9, 15)
94 しゃこがい科(*46-5)
95 まるすだれがい科(表紙中下; 3-上, 下; 7-1; 9-7, 8, 12; 10-1; 12-2, 4, 10; 17-4; 19-11, 12; *25-3～6; 26-2; 35-10; *46-2)
96 ばかがい科(7-12; 10-2; *27-3, 9; *29-8; *48-2)
97 ふじのはながい科(*18-2)
98 りゅうきゅうますほうがい科(18-8)
99 にっこうがい科(7-8; 10-4; 18-9, 10; 48-3)
100 まてがい科(7-13; 18-1; *27-5; 29-9)
101 くちべに科(*18-13)
102 おおのがい科(27-1)
103 におがい科(62-4)
104 そとほりがい科(27-11)
105 しゃくしがい科(7-9; 36-3)

E 頭足綱（とうそくこう）
（たこ，いかの類，頭に口をかこんで足がある，*60）
I **二鰓亞綱**（にさいあこう）（たこ，いかの類，一対の鰓がある）
106 かいだこ科(*60-1)
107 こういか科(60-5)
108 スピルラ科(63-6)
II **四鰓亞綱**（しさいあこう）（アンモナイト，おうむがいの類，二対の鰓がある，*60）
109 おうむがい科(60-2)

巻貝

ボウシュウボラ $\times\frac{1}{2}$

貝殻の構造

氣にもせずに見過ごしている貝殻も、注意深く眺めると、こまかい部分までなかなか精巧で美しくできている。ここでは貝類の二つの大きな群、巻貝と二枚貝からそれぞれの代表的な形をとり上げた。巻貝は殻軸を中心にして廻る螺旋状の殻からできている。先端は殻頂とよばれ、卵からかえった時には一巻き半ぐらいしかなかった小さな殻が、ここから成長しはじめる。動物の体が大きくなるにつれて殻も巻き数が増えながら太くなってくる。螺旋の各階は螺層、上下の螺層の合せめは縫合とよばれる。また、一番下の螺層を体層、それ以外を一まとめに螺塔という。動物の体の主な部分はこの体層に収まって、殻口から頭や足をさし延ばして這い廻る。殻口の内側と外側のへりはそれぞれ内唇、

二枚貝

ハマグリ ×1

外唇と呼ばれる。殻口から下に突き出た所は水管溝で、ここには水を吸い込んで呼吸を助ける水管と呼ばれる体の一部が収まっている。二枚貝は左右の殻からできており、それが殻頂部の蝶番で関接し、角質の靱帯で結ばれている。殻の内側にある二つの丸い痕は閉殻筋痕とよばれ、俗に貝柱といわれる筋肉のついていた痕である。これを運ねて走る外套線は動物の体が殻についていた痕で、弯入と呼ばれる入り込みは、水を出し入れする水管のあった場所に当る。二枚貝の前後、背腹を見分けるには、弯入のある方が後、殻頂の方が背になる。二枚の殻の腹側のすき間から前の方に舌のような足を出して移動する。二枚貝も卵からかえりたてのごく小さな殻から成長しはじめて、だんだん前後腹の三方に向って殻をのばして行く。殻頂がその初りに当る。

貝殻の外形（巻貝）

貝殻の形は実にさまざまで、中には、ちょっとみて巻貝か二枚貝か見分けのつかないものがある。また巻貝と一口にいっても、細長いもの、平たいもの、さらに笠のような形をして一つも巻いていないものさえある。しかし、このようにいろいろな形をしている巻貝も、それらがお互いに少しずつ変っているのだということがわかれば、みな巻貝の仲間であると納得がゆく。ただし、上のように並べた順序が、進化の道すじを示したものと考えられては困る。番号順に見ていただこう。いかにも巻貝らしい**塔型**から始めて、その水管溝をとり螺塔を低くすると**拳型**になる。**円錐型**は螺層と底を平たくしたもので、**平巻型**では螺塔がさらに低く、螺旋が同じ平面で廻っている。**耳型**も螺塔が低いが、巻き数がずっと少くて体層が大きいから巻貝とは見えにくい。さらに螺旋をほぐして短くすれば**笠型**になる。螺塔を低くしても体層を細長くすれば**長型**になり、その上を拡げて下をつぼめると**倒円錐型**になる。長型の螺塔をもっと体層の中に押し込めば**内巻型**になり、平巻型のように同じ平面で旋回するが、螺塔を内に巻込み、外からは体層しか見えない。螺塔を極端に高くすれば**錐型**、体層をとくにふくらますと**球型**、水管溝を引きのばせば**紡錐型**ができる。螺旋が不規則にほぐれたものは**不定型**になる（63頁⑪参照）。

①ボウシュウボラ　②サザエ　③バテイラ　④ヒラマキミズマイマイ　⑤オガイアワビ　⑥カサガイ　⑦マクラガイ　⑧タマゴガイ　⑨クロミナシ　⑩モスソガイ　⑪ナガニシ　⑫タケノコガイ　⑬オオヘビガイ

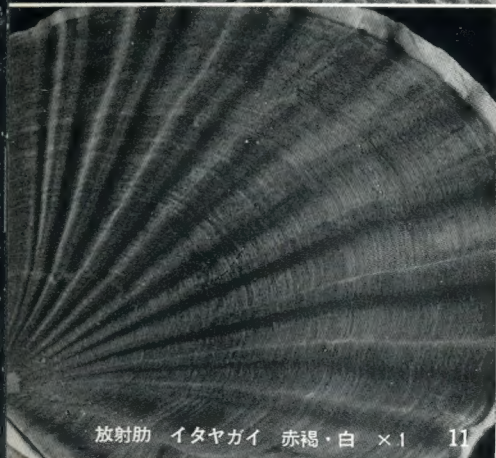
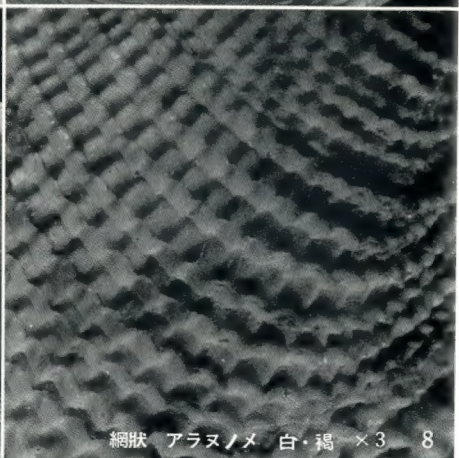
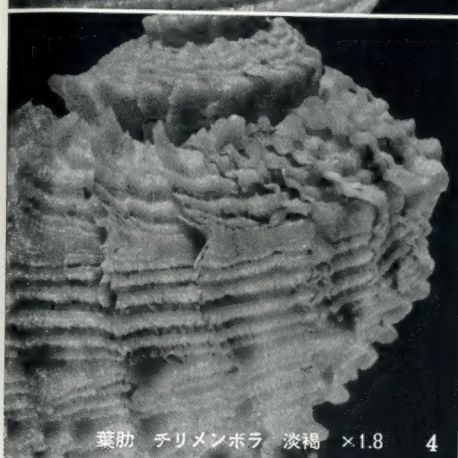
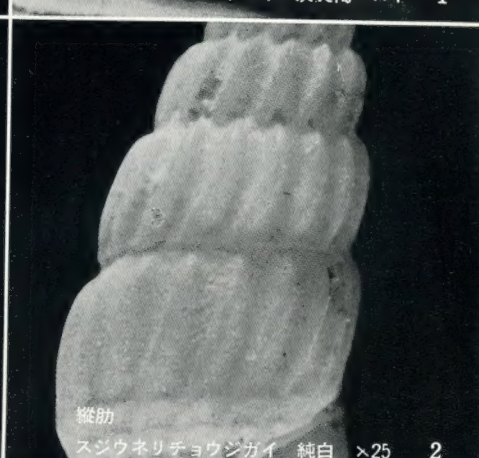
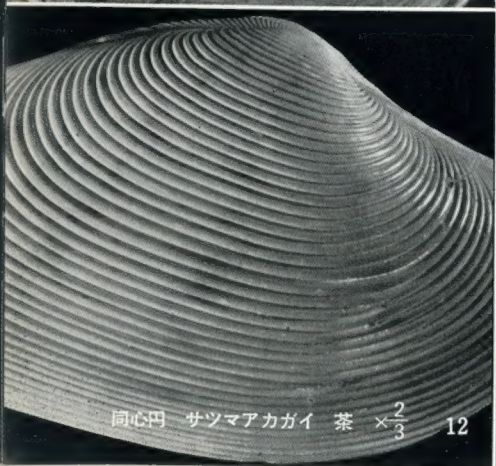
貝殻の外形
（二枚貝と角貝）

二枚貝の形もさまざまだが、巻貝と同じように考えればよい。二枚貝といえばハマグリを考えるほど**蛤型**をしたものが多いが、その蝶番を少し延せば**卵型**になり、もっと引き延して殻を左右にふくらますと**箱型**ができる（前後背腹は3頁と同じ、向側が右殻）。従って手前が左殻、向側が右殻）。**鳥型**はこの箱型の一部を斜め下に引出したようなもので、さらに前後に突出た部分を取りのければ**三角型**になる。次に箱型をひらたくして、一方だけでなく殻頂を中心に三方に延すと**扇型**に、眞直ぐ腹側に延せば**縦長型**になる。蛤型の蝶番をそのままにして後へ延すと**先細型**になるが、もっと極端にして前の方をふくらますと**匙型**になる。蛤型の前後をつめて、左右に平たくすれば**円型**、左右にふくらますと**球型**ができる。蛤型を太くすると**円筒型**になるが、後にずっと延すと**横長型**になる。此の二つの貝のように、後方に水管の出るすき間があって完全には閉じないものもみられる。カキのように岩などにつくものには**不定型**のものが数多くある。

角貝類の殻は細い弓なりの管で、みな似かよった形をしている。巻貝は足がからだの腹面にひろがっているので腹足類とよばれ、二枚貝は多くが斧型の足をもっているので斧足類とよばれる。また角貝は砂や泥を足で掘って、もぐるから掘足類とよばれている。

①ハマグリ　②マツカサガイ　③アカガイ　④ウグイスガイ　⑤イガイ　⑥ホタテガイ　⑦ハネガイ　⑧ベニガイ　⑨オオシャクシ　⑩クチベニツキガイ　⑪トリガイ　⑫ミルクイ　⑬マテガイ　⑭マガキ　⑮ツノガイ

二叉分岐　オオギララ　淡黄・黒　×2.5　10

葉肋　ビノスモドキ　白　×1.5　7

放射肋　イタヤガイ　赤褐・白　×1　11

網状　アラヌノメ　白・褐　×3　8

同心円　サツマアカガイ　茶　×$\frac{2}{3}$　12

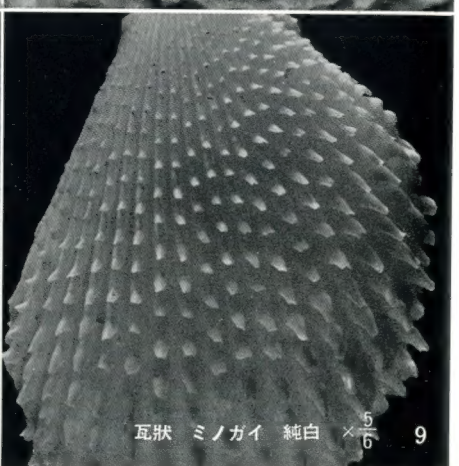
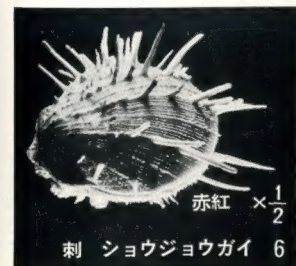
瓦状　ミノガイ　純白　×$\frac{5}{6}$　9

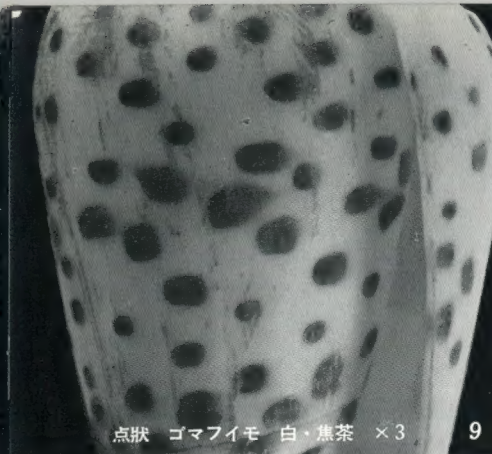
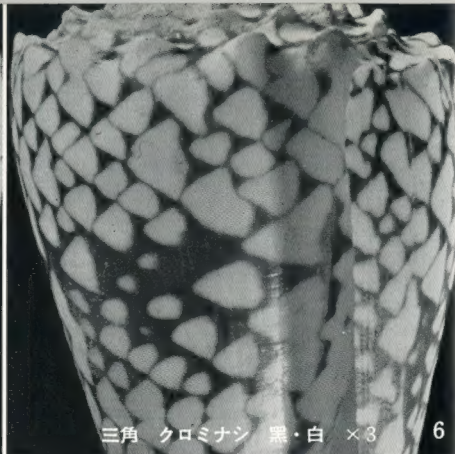
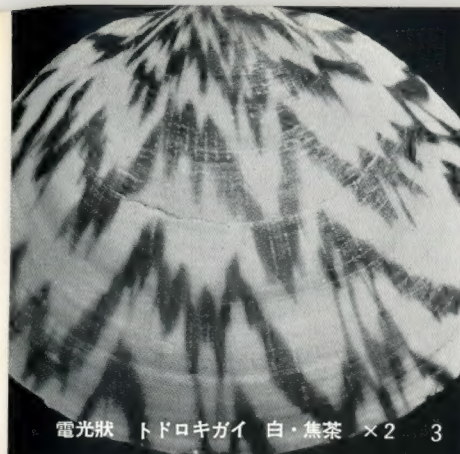
彫刻と模様

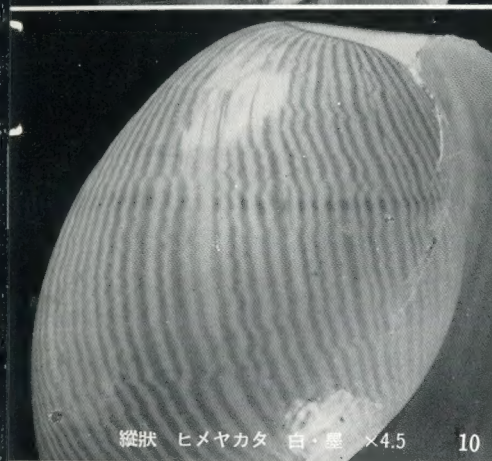
網目
イシバシビワガイ　淡黄・焦茶　×1.5　3

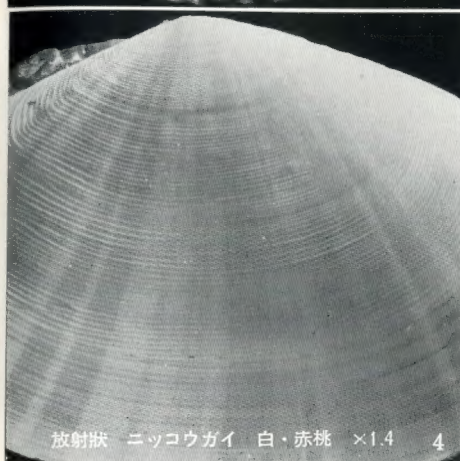
横肋　シライトマキ　淡黄褐　×1　1

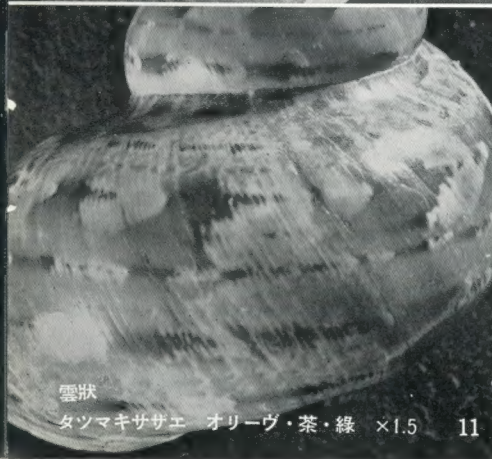
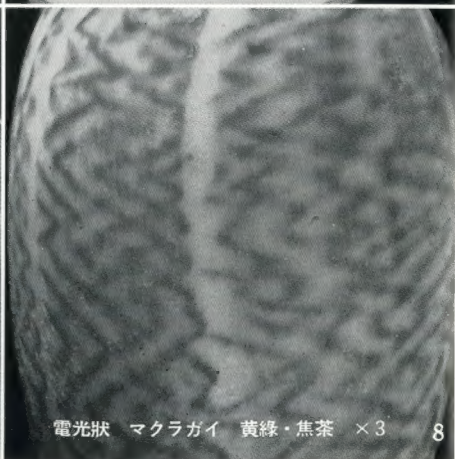
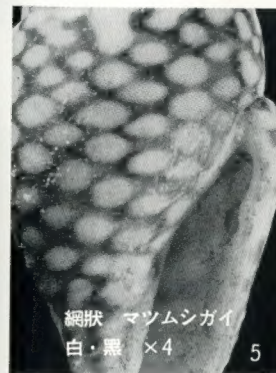
葉肋　チリメンボラ　淡褐　×1.8　4

縦肋
スジウネリチョウジガイ　純白　×25　2

貝殻の表面には，いろいろな彫刻がきざまれている．これも殻の形と同様に，はなはだ雑多なようにみえながら，やはりいくつかの基本的な形がある．一つは，殻の成長にしたがってきざまれる成長線に平行なもので，それは巻貝では縦状になり，二枚貝では同心円状になる．これにたいして，成長線に直交するものがあり，巻貝では螺状，二枚貝では放射状になる．縦状と同心円状の彫刻が薄板になってはり出せば葉肋になる．この他，突起には瘤状から棘状までいろいろあり，瓦状の突起は巻貝におおく肋の分岐は，二枚貝にみられる．

赤紅　×$\frac{1}{2}$
刺　ショウジョウガイ　6

白・淡褐　×$\frac{1}{3}$
刺　ホネガイ　5

点状　ゴマフイモ　白・焦茶　×3　9

三角　クロミナシ　黑・白　×3　6

電光状　トドロキガイ　白・焦茶　×2　3

三角　マルオミナエシ　白・焦茶　×2　1

縦状　ヒメヤカタ　白・墨　×4.5　10

螺状　ヤカタガイ　白黄・墨　×2　7

放射状　ニッコウガイ　白・赤桃　×1.4　4

点状　ホクロガイ　淡黄褐・茶　×2　2

雲状
タツマキサザエ　オリーヴ・茶・緑　×1.5　11

電光状　マクラガイ　黄緑・焦茶　×3　8

網状　マツムシガイ
白・黑　×4　5

貝殻の表面には彫刻とは別に，いろいろな自然の美しい模様がある．この模様も，彫刻と同じように貝の種類により，また種類群によってそれぞれの定った形をとることが多いので，われわれが貝を分類する場合，役に立つ．模様もまた，成長線との関係て，縦状，同心円状，螺状，放射状などの形ができ上る．しかし二枚貝の同心円状は明瞭なものが多くない．模様には，この他に点状，三角状，網状，電光状などがあり，巻貝には不規則な雲状の斑をもつものもある．さらに，これらいくつかの形が組合わされば，模様は一そう複雑になる．もちろん，模様のないものも少くない．また，貝の色は決して單純ではない．ここに書かれている色は，一應の目安にすぎない．

クボガイのふた（螺旋）×3　5

マルタニシのふた（同心円）×2　6

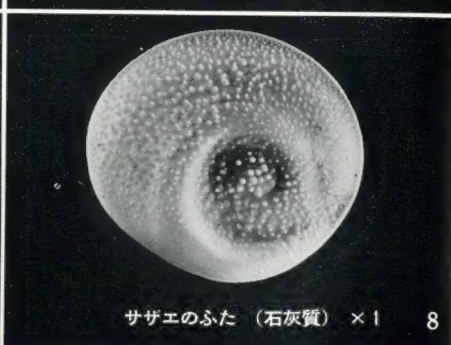
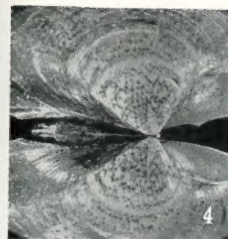
バイのふた（偏心円）×1.5　7

サザエのふた（石灰質）×1　8

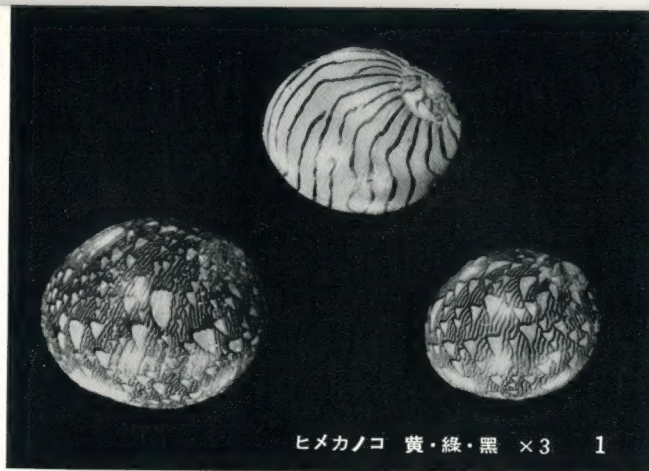
マカキの蝶番（貧歯）×5　9

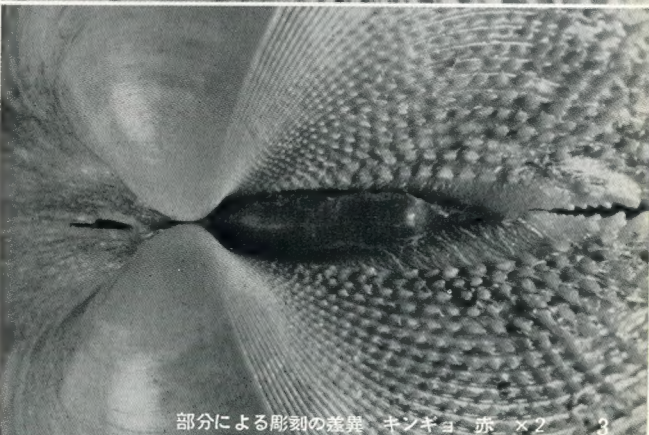
ハマグリの蝶番（完歯）×1　10

サルボオの蝶番（多歯）×2　11

ツキヒガイの内靱帯　×2　12

ハマグリの外靱帯　×$\frac{1}{3}$　4

細かい形態

昔から貝の分類は殻の特徴によって行われてきた．最近は動物体の比較研究がすすみ，次第に訂正されてはいるが，今日でも貝殻は分類上の重要さを失ってはいない．しかし殻の特徴といっても外形や彫刻，模様だけでは他人の空似は見分けにくい．同じ種類でも一つ一つ色彩や模様の異るもの，同じ殻でも部分で彫刻の異るものがある．小月面（しょうげつめん）は二枚貝の殻頂の前にある心臓形の部分で，種類により有無，形状はさまざまである．巻貝にはたいてい角質か石灰質のふたがあるが，螺旋，同心円，偏心円など，その成長のし方で分けられる．蝶番は櫛歯状，歯のないもの，歯の少いもの，靭帯は殻の外にあるものと，中にあるものとに分けられる．

ヒメカノコ　黄・緑・黒　×3　1

小月面　ビノスモドキ　白　×4　2

部分による彫刻の差異　キンギョ　赤　×2　3

ナミギセルの殻口内のひだ　×5　9

マキミゾグルマの臍孔　×2　8

クダマキガイの切込　×1　14

シロイガレイシの外唇歯　×3　12

カズラガイの縦張脈　$\times\frac{2}{3}$　10

チョウセンフデの内唇襞　×1　15

イソバショウの外唇突起　×2　13

クチムラサキダカラの幼貝螺塔　×3　11

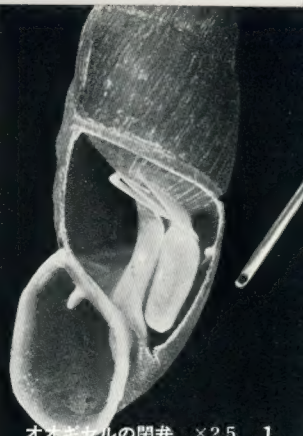
6

ツキヒガイ
濃赤・白黄　$\times\frac{1}{3}$

キセルガイの閉弁は動物体が殻内深く入り込むと自動的に閉じるばね仕掛である．この形は種類で異る．殻皮はふつう薄いものだが発達する種類でははがすと全く違った貝にみえる．殻口内にも突起や切れ込み，内唇上の襞など，いろいろな構造がみられる．縦張脈は巻貝の成長が一定時に休止し，殻口外唇がひろく厚くなった跡である．巻貝の螺旋がゆるく巻けば殻軸の部分が空になって，臍孔ができる．宝貝が巻貝類に属することは，幼貝や成貝の断面でわかる．

7

ホシキヌタ（切開）
黄褐・白　$\times\frac{3}{5}$

オオギセルの閉弁　×2.5　3

オオギセルの閉弁　×2.5　1

褐・茶褐　$\times\frac{2}{5}$
カコボラ（殻皮をとった後）　4

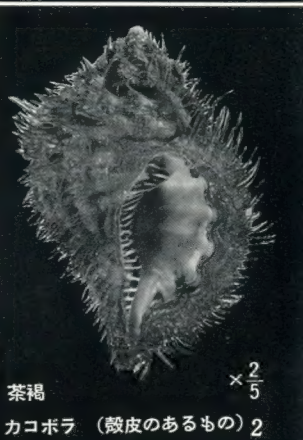
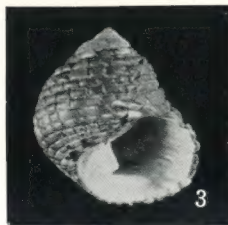
茶褐　$\times\frac{2}{5}$
カコボラ（殻皮のあるもの）　2

ハナマルユキダカラ（切断面）焦茶・白　×3　5

シマタケ　純白・黒　×1.3　2

モロハバイ　白（殻皮褐）×1.5　1

海の貝

貝は淡水や陸にも棲んでいる。しかし貝といえば海の貝を連想するように大多数の貝は海で採れる。海に棲む貝は、潮の干満のある所から深さ百米位までの浅い海に多く、以下数千米の深海まで、深くなるにつれて種類も数も少くなる。また、暖流と寒流の流れる場所で、その種類が異ってくる。暖流系の貝は種類も多く、一般に緻密で装飾もはなやかである。これに対して寒流系の貝は厚くてもろく、色彩も地味である。北の貝はまたその種類も少いが数からいうと南の貝よりはるかに多い。このほか、外洋から内海に入ると、ここにはまた別な貝類が棲んでいる。ここは淡水や陸の影響をうけ、貝類の特徴も、前の二群の中間にある。アサリなどは北海道から九州まで、殆ど日本全國に棲んでいる。

ヒナガイ　白・褐　×1.7　4

イシダタミ
青緑・赤褐　×1

暖流系，寒流系というように，各地方によって貝類の分布が移りかわるのと同じように，同じ地方でも，その棲む場所によって貝の種類が変ってくる．磯のような岩の多いところに棲む貝は，波にさらされて生活するので，イシダタミのように一般に固くごつごつした感じのものが多いが，これと反対に，砂や泥の多いところでは，砂や泥に潜り込む習性からヒナガイのように，大てい表面がなめらかですんなりした形をしている．また，浅いところに棲む貝は，クボガイ（24頁）のように丈夫な殻で身を守るものが多く深い海の底では，その静かな環境のためにホネガイ（8頁）のように装飾の発達したものや，オオシラタマのように薄い殻に身を包むものが多い．

オオシラタマ　白　×3　5

ヤカドツノガイ　白　×1　7

シチクガイ　紫褐・白　×1.4　6

カニモリ　茶・白　×1.3　5

ヨウバイ　茶・白　×2　4

ワスレガイ　紫　×$\frac{1}{2}$　12

サギガイ　白　×$\frac{4}{5}$　10

イソシジミ　オリーヴ　×$\frac{1}{2}$　8

クチベニ　白・紅　×1.5　13

コタマガイ　白・茶・黒　×$\frac{1}{2}$　11

サクラガイ　桃　×1.8　9

ゲンロクソデガイ　白　×2.5　15

ツメタガイ　茶褐　×$\frac{3}{4}$　14

ツメタガイのあけた孔

浜　の　貝

浜に打ち上げられた貝殻を拾うのが貝を採集する一ばん手軽な方法である．拾った貝は真水であらい一種類ずつ，名前と産地を書いた紙片を添えて同じ大きさの小箱かセロファンの袋に入れ，これをさらに大箱に並べておく．砂浜で拾える貝は薄くてきゃしゃな二枚貝が多く巻貝は少い．その二枚貝に丸い小さな孔があいていたら，それは砂に潜って貝を食べるツメタガイの仕業である．フジノハナガイは潮の満干に従っていつも波打際の砂地に潜っているから足を濡せば生きたものをとることができる．クチベニは外側は白いが内側は縁にそって紅をぬったように赤い．キサゴの類(27頁)はそのままおはじきになる．

ミゾガイ　[illegible]　×2.5　1

フジノハナガイ　黄橙　×6　2

ウラウズガイ　白・紫紅　×2.5　10

チリボタン　白・鮮紅　×2　9

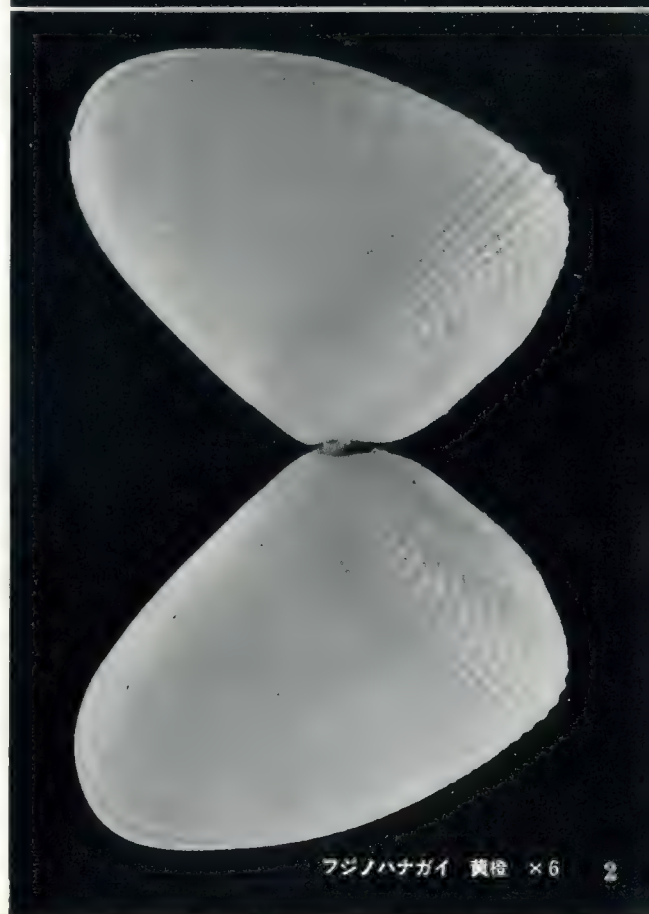
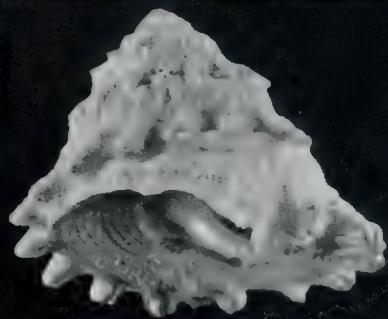
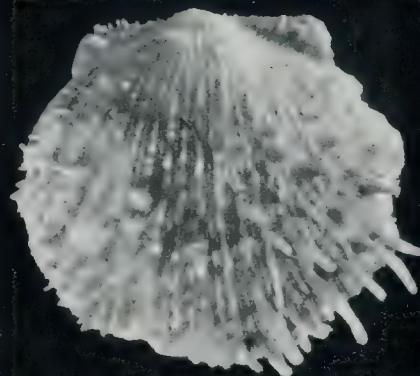
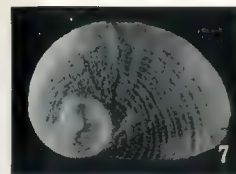
ヒラスカシ　薄墨　×4　15

イボフトコロ　白・褐　×3.5　13

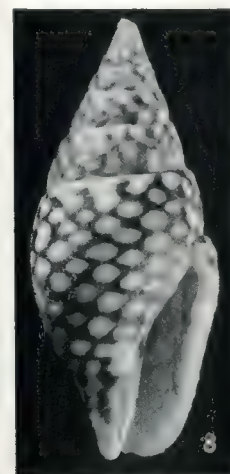
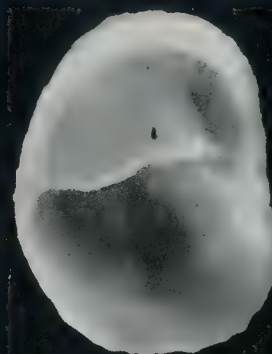
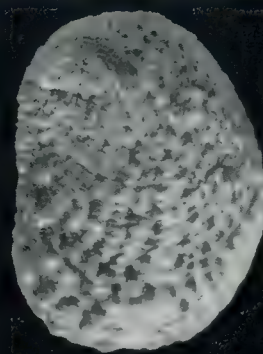
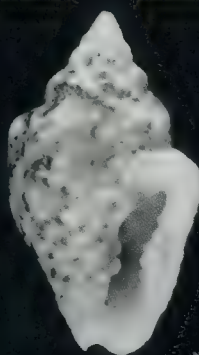
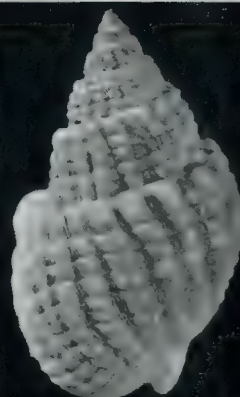
ムシロガイ　薄墨　×2　11

スジウネリチョウジガイ　純白　×11　16

シラギク　純白　×13　14

キリオレ　茶　×5　12

アシヤガイ　灰褐　×2　7

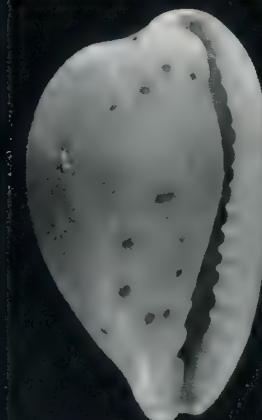
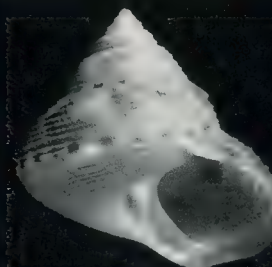
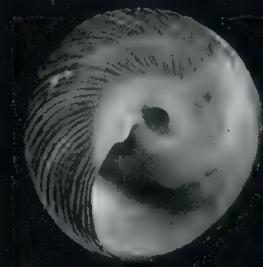
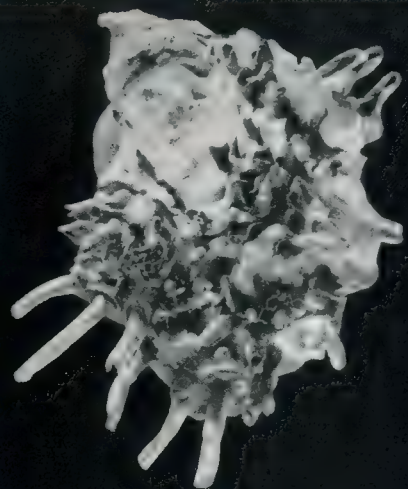
磯辺の貝

砂浜が終って岩だらけの磯が始まる辺りには，小砂利や海藻と一しょにたくさんの貝が打ち上げられる．その中には小砂利にまじって，ゴマ粒のような貝もとれる⑭⑯．しかしこれは幼貝ではなく拡大鏡で見ると整った形をした立派な成貝である．

マツムシガイ　白・黒　×2.5　8

アワブネ（腹面）　純白　×1.5　2

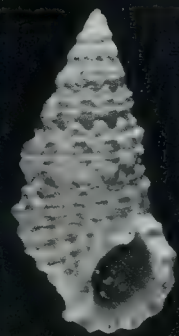
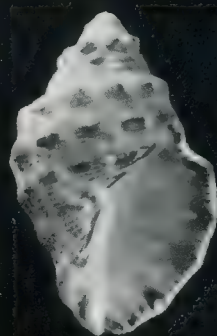
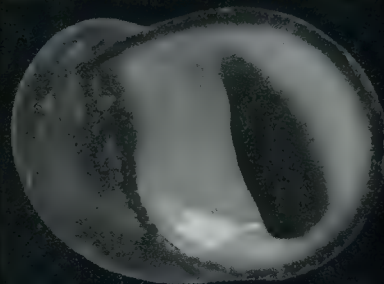
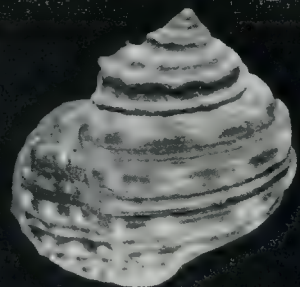
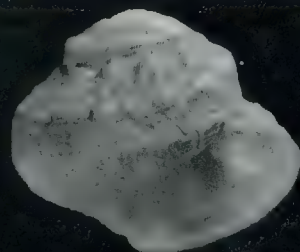
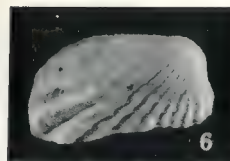
アワブネ（背面）　茶褐　×1.5　1

メダカラ（側面）　淡青・焦茶　×3　4

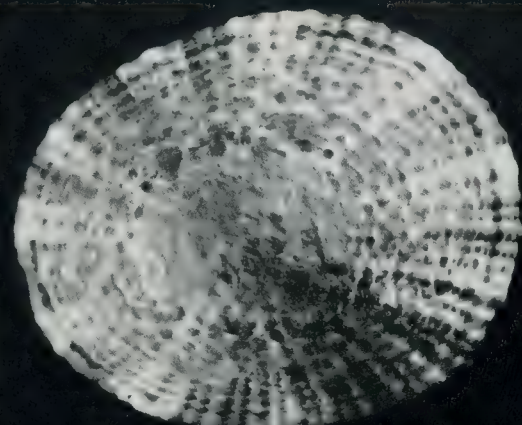
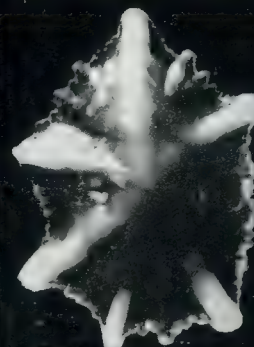
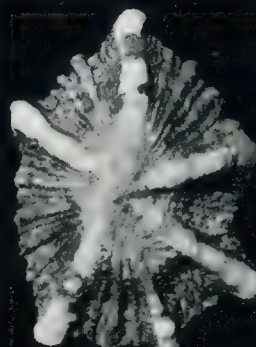
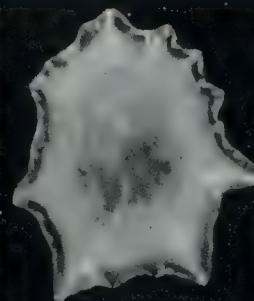
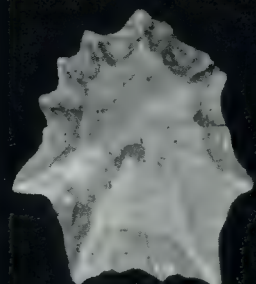
メダカラ（背面）　淡青・焦茶　×3　3

エビスガイ　茶・焦茶　×1.5　6

バテイラ　焦茶　×$\frac{2}{3}$　5

ケガキ　薄墨　×1.5　10

ミノクジャク　緑褐　×2　7

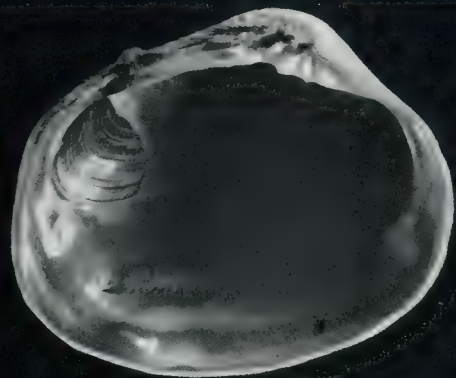
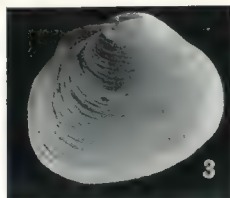
黒　×2
カヤノミカニモリ　12

イボニシ　黒　×1.5　11

アマガイ　薄墨・白　×4　8

タマキビ　黒茶・白　×3　13

スガイ　黄褐　×1.5　9

トマヤガイ　茶褐・白　×1

磯　の　貝

潮がひいたあとの磯には水溜りや岩の表面，隙間などに巻貝がたくさんいる．二枚貝は，ミノクジャクやトマヤガイのように岩に附着して生活するもの以外は，種類も少い．生きた貝を標本にするには，ゆでてから針で身を抜いておく．ふたのあるものは殻と一しょに保存する．笠型の貝は岩にしっかり附いているのでナイフを使わなければはがれない．キクノハナガイも笠型だがカタツムリのように肺で呼吸する．タマキビは満潮時でないとしぶきのかからない位高い所に棲む．ケガキはマガキと別々に棲むことが多い．スガイの丸いふたは，皿に入れて酢にひたすと，石灰質がとけてそろそろと動き廻る．イシダタミ(17頁)も磯に多い．

ベッコウガサ　淡黄・黒茶　×2　1

黒・白　×1.5
キクノハナ　(内面)　4

黒・白　×1.5
キクノハナ　(背面)　2

白・黒・茶　×1
ウノアシ　(内面)　5

黒・白　×1
ウノアシ　(背面)　3

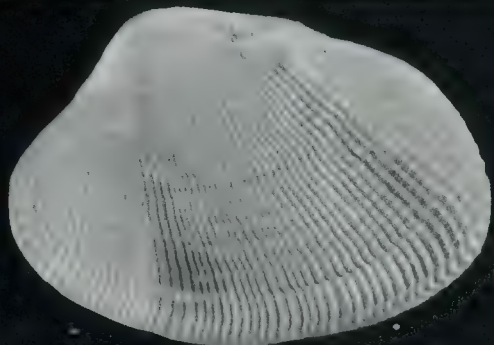
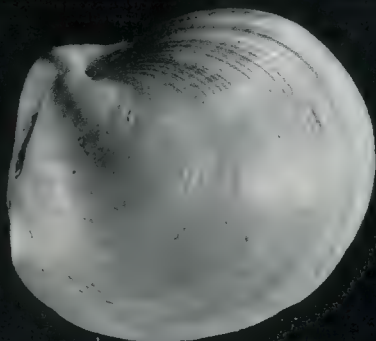
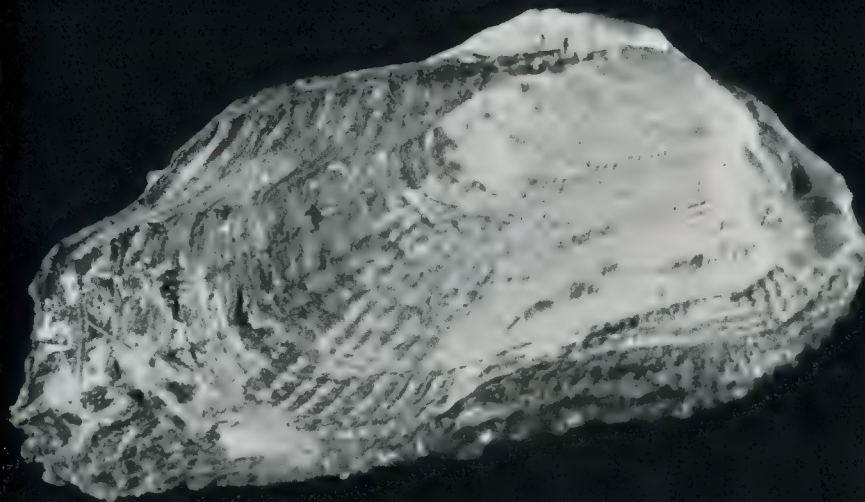
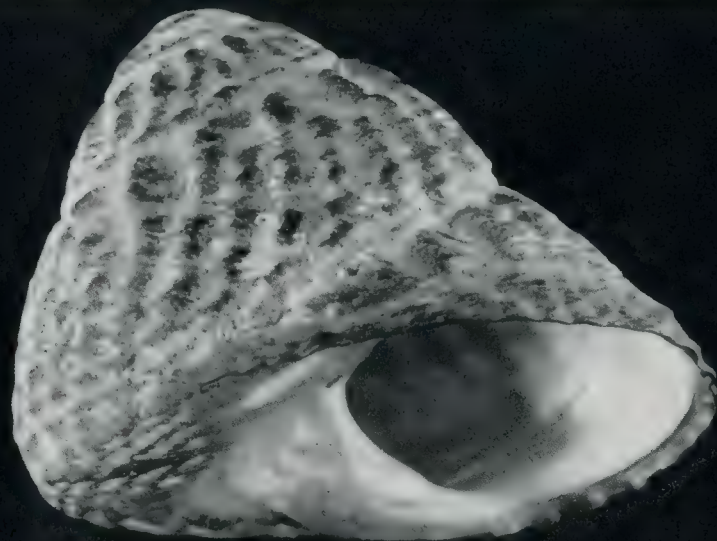
ウチムラサキ（内面） 紫 ×$\frac{4}{5}$ 4

アサリ 白・茶・黒 ×2 5

オキシジミ 黄褐 ×1.5 6

ウチムラサキ 淡褐 ×$\frac{3}{8}$ 3

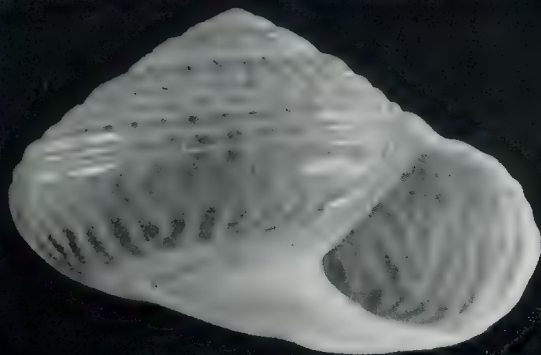
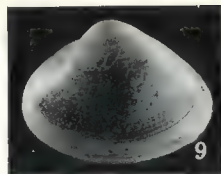
潮 干 狩 の 貝

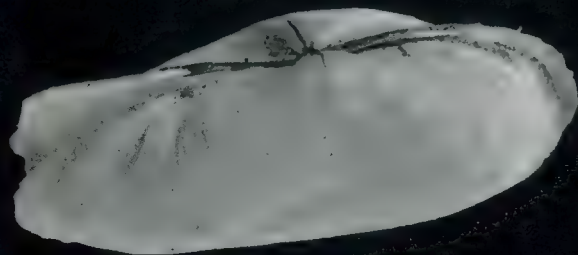
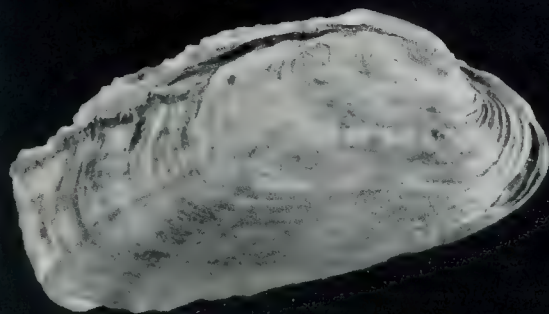
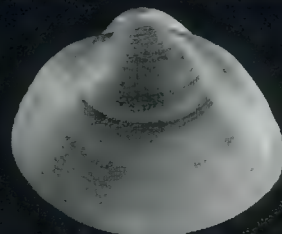
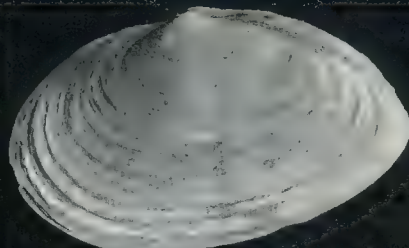
陽氣の暖い四月なか頃の大潮がくると，人々はみな潮干狩に出かけて行く．今まで述べた場所は主に外洋に面した所で，潮がひいても狭い場所しか現われないが，東京湾のような内海になると，遠浅て，潮がひくと廣い干潟が現われる．ここは川からたくさんの眞水が流れこむので，塩分は少いが栄養は豊富て貝の繁殖には都合がいい．干潟も砂浜のように二枚貝が多くて巻貝は少い．ウチムラサキは表面は淡褐色でごつごつしているが，內側は滑かて濃い紫色をしている．アサリは誰でも知っている．一つ一つの貝殼によって，模樣が非常に変化に富んでいて，中にはなかなかきれいなものもある．この貝の青黑い色は煮ると褐色に変る．

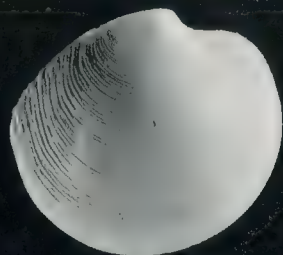
アオカリガネエガイ 白・焦茶 ×3 1

クボガイ 黒 ×3.5 2

イボキサゴ　黄緑・黒　×5　10

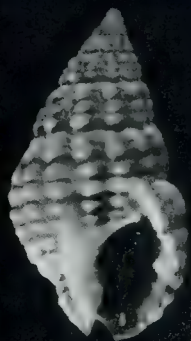
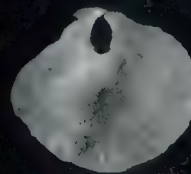
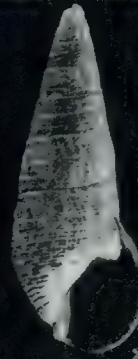
ウスギヌ　白　×1.7　11

ウネナシトマヤ　白・黄褐　×2.5　12

9 バカガイ　黄褐　$\times\frac{1}{2}$

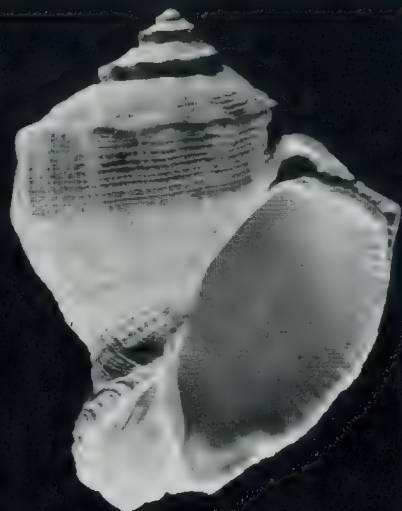
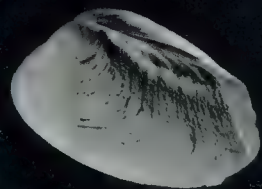
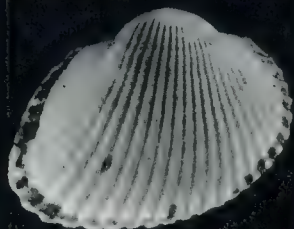
バカガイは青柳（あおやぎ）とも呼ばれ，青柳鍋でひとびとに親しまれている．またこの貝の貝柱は「はしら」とか「あられ」などと呼ばれてこれも食用になる．カガミガイも地方によっては食用にされる．マテガイも食用の貝だが，これを採るにはまて突きで突いたり，棲んでいる孔に食塩を入れたりする．ウネナシトマヤガイは石垣やのりのひびなどに附着して生活する．ナミマガシワの殻は薄くて雲母のような光沢がある．この貝は右側の殻の殻頂にある丸い切れ込みを通して足から足糸（そくし）を分泌し，地物や他の貝殻に附着する．ホトトギスもまたお互いの足糸でからみ合い，時に砂や泥の上を蔽いつくしてしまうので，アサリやハマグリの養殖に非常な害を与えることがある．

シオフキ　白・紫褐　×1.3　3

オオノガイ　白　$\times\frac{1}{2}$　1

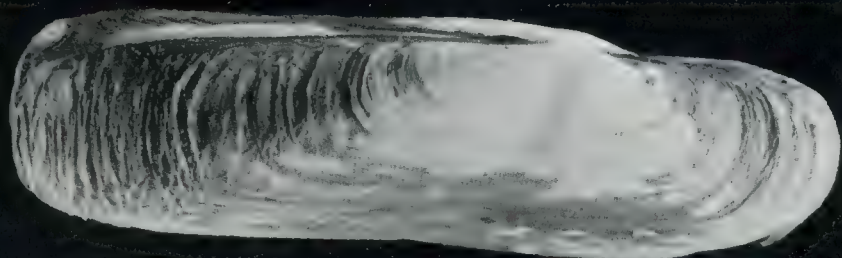
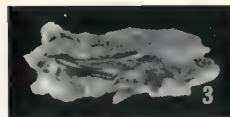
ホトトギス　緑・紫褐　×3　4

カガミガイ　白　$\times\frac{1}{2}$　2

マテガイ　褐　×1.3　5

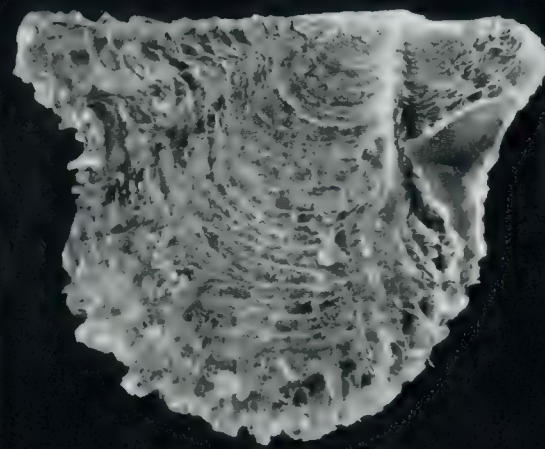
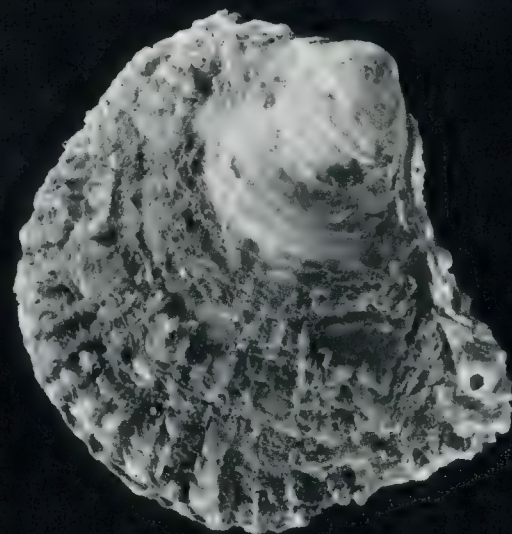
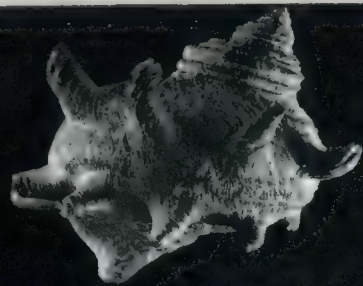
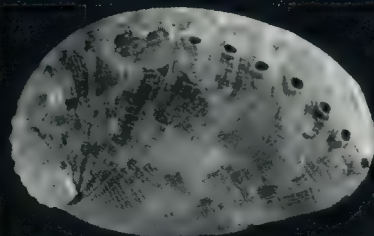
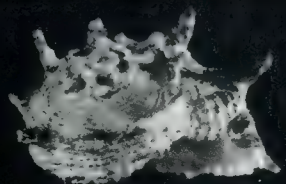
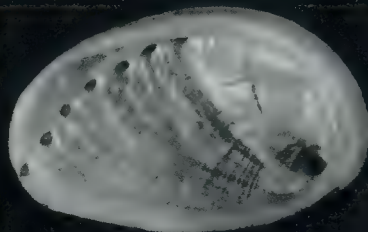
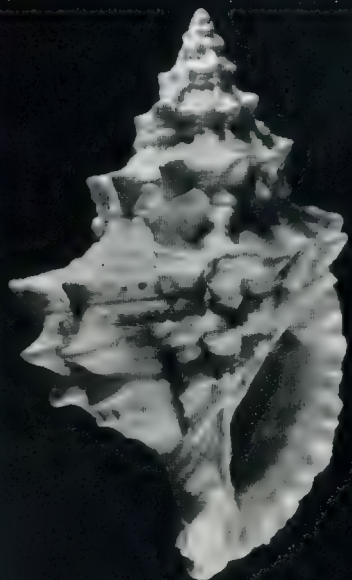
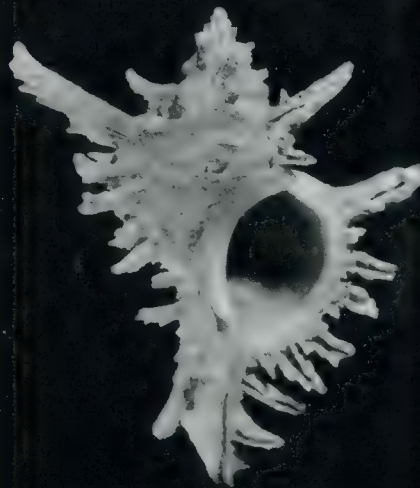
ナミマガシワ　白　$\times\frac{1}{2}$　8

アラムシロ　黄褐・黒　×2.5　7

ウミニナ　黒茶・白　×1.3　6

タイラギ　黒　$\times\frac{1}{4}$　5

アカニシ　淡褐・焦茶　×1　4

ミルクイ　白（殻皮焦茶）　$\times\frac{1}{4}$　8

サルボオ　白（殻皮焦茶）　×1　7

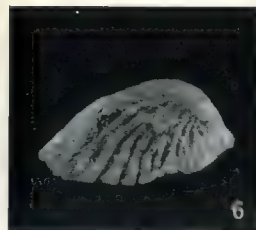
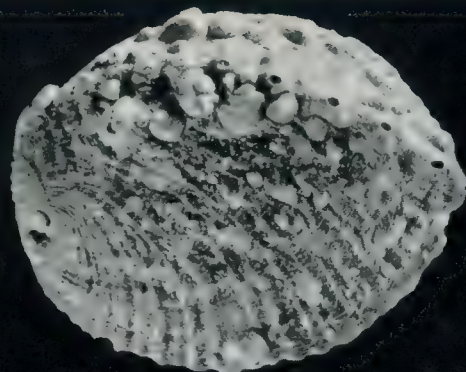
バイ　白・褐　$\times\frac{1}{2}$　6

アゲマキ　白（殻皮黄）　×1　9

マガキ　薄墨　$\times\frac{1}{5}$

市　場　の　貝

内湾の少し深いところにも食用になる貝は少くない．干潟のアサリやハマグリのように大量にはとれないが，大型で味もよく，食品として市場に出る．これをとるには網や潜水などの方法がつかわれる．イタボガキはマガキに似ているが，放射状のひだが細くて数が多く，マガキよりも深いところに棲む．タイラギはタイラガイともよばれ貝柱が大きくて食用になる．アカガイ（7頁）トリガイ（6頁）もすしのたねになる．サルボオはアカガイよりも小さく，放射肋の数が少い（32本位）．肉が固くて味も落る．眞珠をとるアコヤガイも内海の岩などに附着している．バイは外海にも居り，昔は殻を切って鉛をつめ，独楽にした．ベーゴマである．

アコヤガイ　淡褐　×1.7　1

イタボガキ　薄墨　×1.2　2

サザエ　鶉茶　×$\frac{3}{5}$　10

トコブシ　黄緑・茶　×1　7

カタベガイ　紅　×1.2　11

トコブシ（内面）眞珠光沢　×1　8

オオナルトボラ　茶褐　×$\frac{1}{2}$　12

オニサザエ　白　×$\frac{2}{3}$　9

キクスズメ　茶褐　×1.3　6

水　産　業　と　貝

漁網には魚とともに，また蛸壺にもいろいろな貝が入ってくる．これを集めれば，浜や磯で拾えない貝も採ることができる．またテングサやカジメなどの海藻の乾し場にも波にさらされない新鮮な小貝②③④⑤がたくさん落ちている．アワビの表面には，この写眞でも見られるように，笠形で放射状の筋のある茶褐色のキクスズメがたくさん附いている．これはまたサザエ等の殻にもついている．トコブシは，アワビ類よりもあさいところに棲み，小型で孔のかずがおおい（7，8個）ので見分けがつく．サザエは，地方によってとげのあるものがおおいところと，ないものがおおいところとがある．

メカイアワビ　茶　×$\frac{1}{2}$　1

クリイロマンジ　褐　×20　4

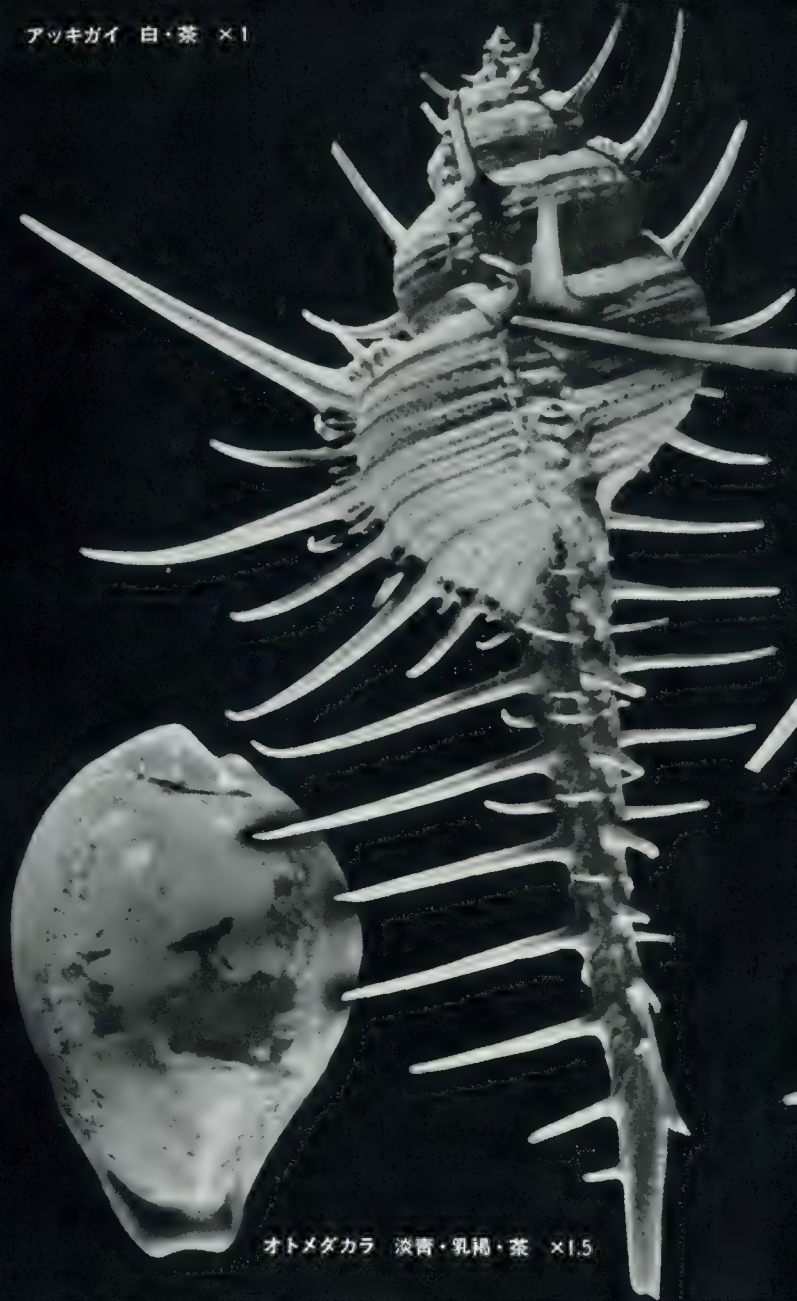
エビガイ　淡褐・茶　×3.5　2

×2.5

チグサガイ　鶉茶・栗・緑　5

×3

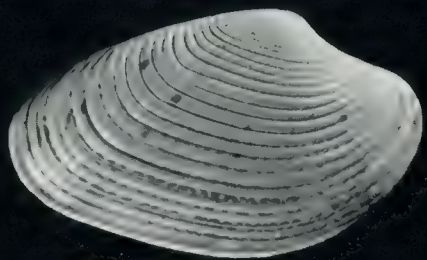
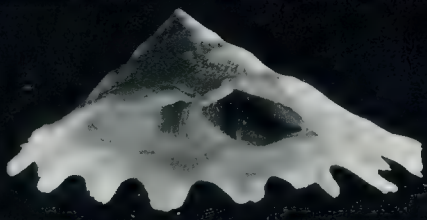
サラサバイ　赤褐・白・緑　3

アッキガイ　白・茶　×1

オトメダカラ　淡青・乳褐・茶　×1.5

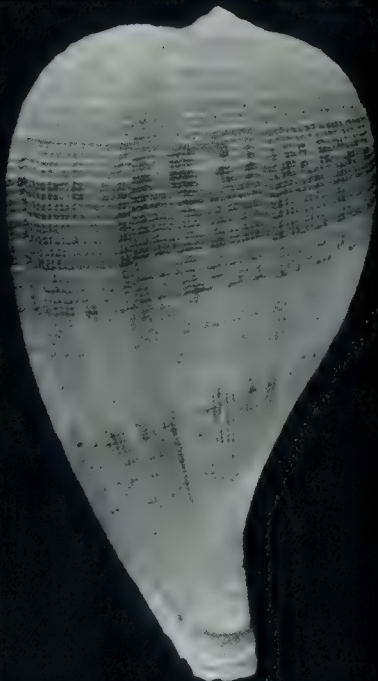
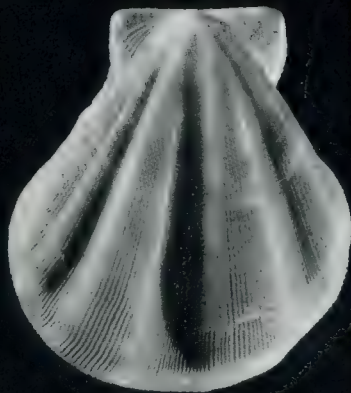
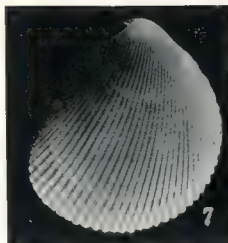
ハリナガリンボウ　桃赤　×1.4

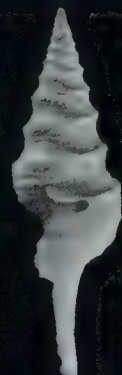
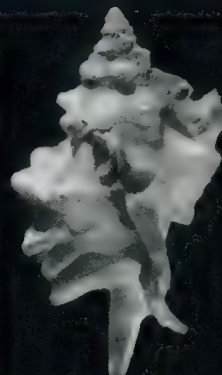
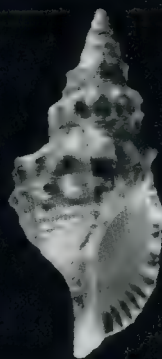
カラスキ　白　×1

トサツブリ　淡褐・焦茶　×1.7

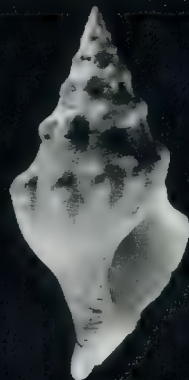
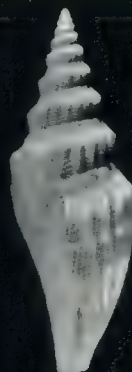
アザミガイ　淡紅褐　×2

スダレガイ　茶　×1　10

キヌガサ　茶褐　×1　11

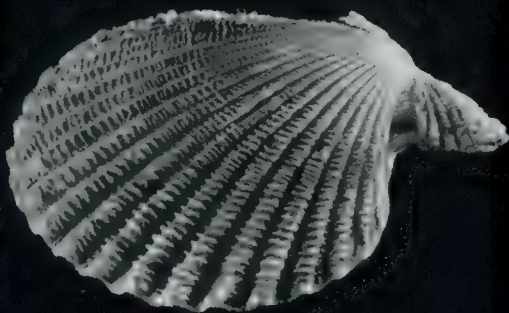
ビワガイ　茶　×1.2　8

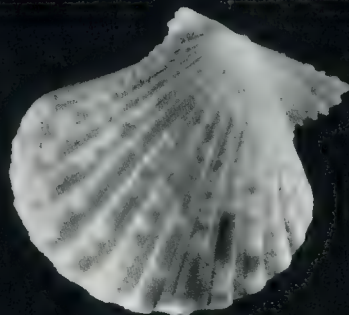
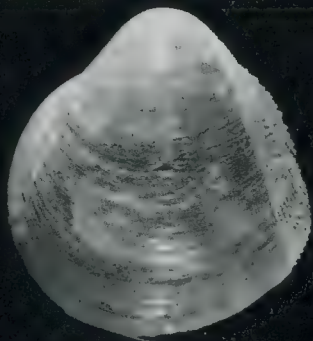
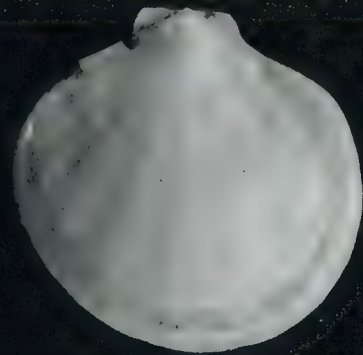
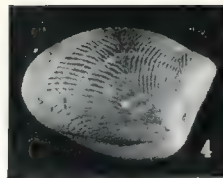
ヤツシロ　淡黄褐・茶　×1　12

キンチャクガイ　桃赤　×2　9

ザルガイ　茶褐　$\times\frac{2}{5}$　7

外海の海岸に行くと，よく幅3尺ほどの帯のような網が竿に乾されている．これは，夜中深さ15米位の岩場にかけてイセエビをとるエビ刺網で，これにはエビといっしょにいろいろな貝もかかってくる．この網干場に落ちた貝類を探し集めるのも面白い．イソバショウ(12頁)は外唇の牙が特徴．ボウシュウボラやカコボラ(14頁)も，ここであつめられる．イセエビが禁漁になるとある地方では，この網でクルマエビをとる．深さは同じ位だが，こちらは砂地にかけるので全く異った貝がかかる．岩場の貝よりきゃしゃで種類も多く，二枚貝もある．シドロは成長すると外唇が袖のように張り出す．キヌガサは体層の縁が笠のように垂れ下る．ザルガイはトリガイの仲間で殻が厚く放射状の溝がある．

クダマキ　茶　×1　4

イソバショウ　白　×1　1

茶・焦茶・白　$\times\frac{1}{2}$
ボウシュウボラ　5

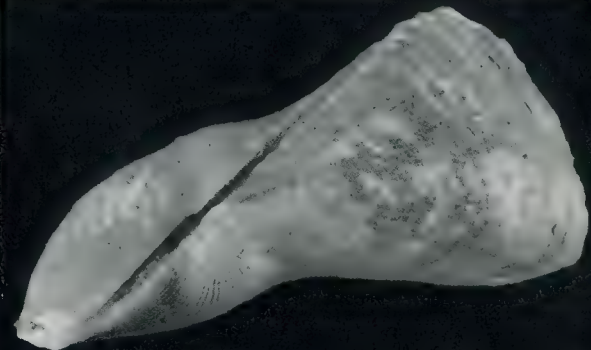
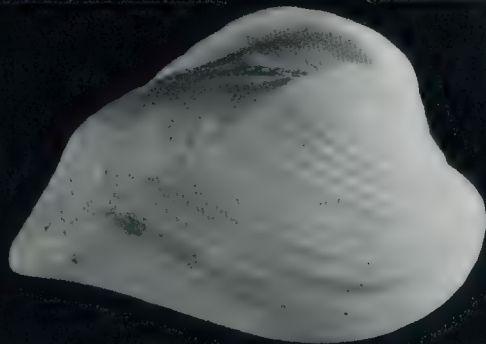
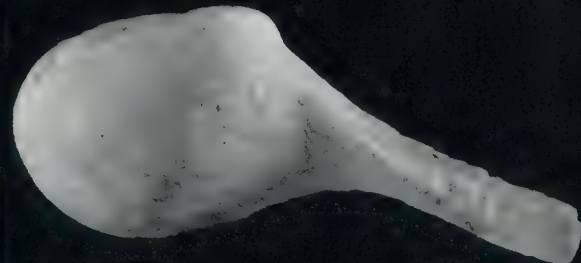
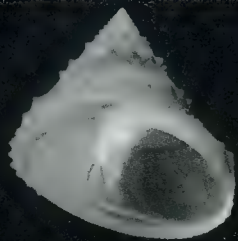
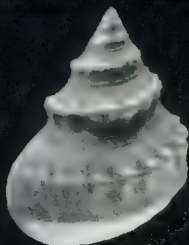
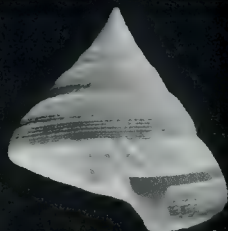
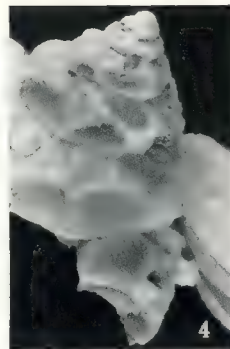
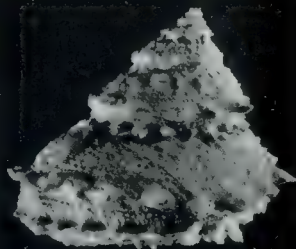
ミガキボラ　白　$\times\frac{2}{3}$　2

$\times\frac{2}{3}$
シドロ　(成貝)　茶・白　6

×1
シドロ　(若貝)　茶・白　3

クラゲツキヒ（内面）×$\frac{3}{4}$　8

ヒアオキ　赤褐　×$\frac{4}{5}$　5

オオハネガイ　淡黄　×$\frac{1}{2}$　9

ヒヨクガイ　赤褐　×2.5　6

キンギョ　赤　×$\frac{2}{3}$　10

クラゲツキヒ　淡黄・橙　×1.2　7

オオキララ
淡黄・黒　×$\frac{3}{4}$

深　い　海　の　貝

エビ網をかけるあたりから深さ100〜200 mぐらいまでの海底は傾斜が緩かで，その先は急に深くなる．この大陸棚とよばれるところは底曳網の主な漁場で，打瀬網，手繰網，トロール網など，各種の網が曳かれる．その漁獲物を陸揚げする所は深い海（深海魚の住む深さではない）の珍らしい貝をあつめる絶好の場所である．ビョウブガイはアカガイやサルボオの類で蝶番に櫛のような歯があり（13頁）プロペラのようにねじれる．クラゲツキヒはツキヒガイ（14頁）に似るが，ずっと深い所に棲み殻が薄く半透明である．イタヤガイ（9頁）はよくホタテガイ（6頁）とまちがえられるが，右の殻が深く彎曲し，片方が偏平なので区別できる．ボッティチェルリの名画「ヴィナスの誕生」の貝は地中海産の板屋貝である．

ビョウブガイ　褐　×1　1

コウホネ　淡茶褐　×2　2

シャクシ　白　×2　3

ハリエビス　純白　×$\frac{3}{4}$　8

ギンエビス　銀白　×$\frac{2}{3}$　7

橙赤　ベニオキナエビス　×$\frac{1}{4}$　6

キリガイ　淡黄褐　×$\frac{3}{5}$　15

黒茶・淡褐　フデガイ　×$\frac{3}{4}$　13

白茶　ジュズカケクダマキ　×$\frac{3}{4}$　11

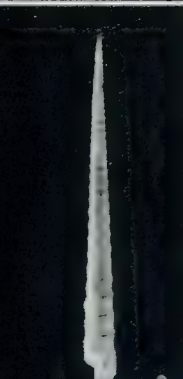
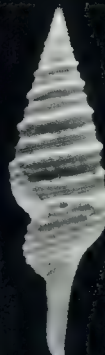
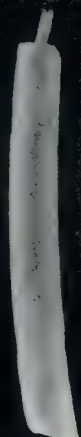
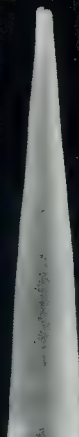
ハリサザエ　淡紅　×$\frac{1}{2}$　9

乳白　ロウソクツノガイ　×2.5　16

乳橙　ワロウソクツノガイ　×3.5　14

黄褐　ヒラツノガイ　×1　12

トンボガイ　白茶　×1.3　10

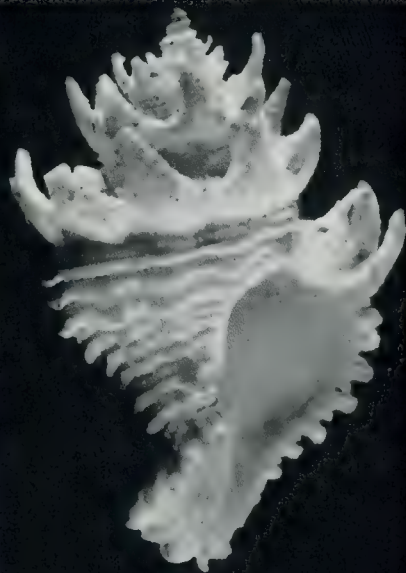
クマサカガイ　茶褐　×1

クマサカガイは他の貝の死んだ殻や石を集めて自分の殻に膠着する習性があり，これが強賊熊坂長範を連想させるのでこの名がある．④はその殻を取去ったもの．ベニオキナエビスは深い岩場に棲み，他の珍種とともに珊瑚網や延縄でとれる．この類は地質時代にさかえ千種以上を数えたが，今では世界中で７種（うち４種が日本）しか残っていない．トンボガイはシドロ（34頁）の類だが，成長しても袖が発達しない．

シュモクガキ　白　×$\frac{1}{6}$

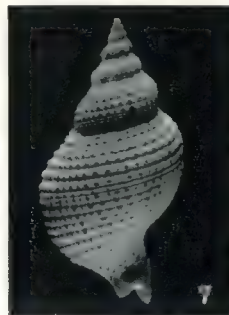
クマサカガイ（背面）白　×1　1

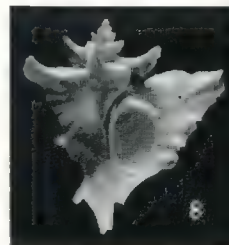
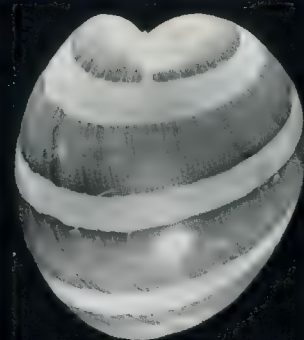
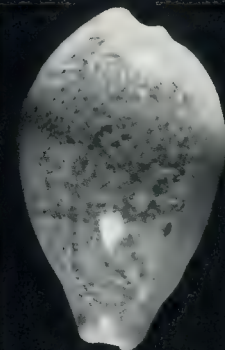
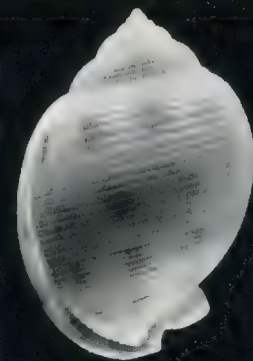
リンホウ　赤　×$\frac{4}{5}$　2

マキミゾグルマ　淡褐茶　×1　3

イトグルマ　淡褐　×1　11

テンニョノカムリ　白　×1.7　9

ハッキガイ　白　×$\frac{2}{3}$　12

マツカワ　淡茶褐　×1　10

シマアラレミクリ
淡紫褐・焦茶　×$\frac{2}{3}$

タカラガイの種類は一般に浅い岩礁に多いが，深い海にもいくつかの種類が棲んでいる①．大きくて上品な色のオトメダカラ(33頁)は，蒐集家に喜ばれる．ヒガイは宝貝の近縁で内巻型の貝である．殻口が極端に長い．マツカワガイは，螺旋の半周ごとに，規則正しく現われる縦脹脈が薄くひろがり，はがした松の皮のような形をしている．ヤカタガイはウミウシ(60頁)の仲間で殻は薄くて軽い．

イセヨウラク
白　×$\frac{1}{2}$

ヤカタガイ　淡黄・黒　×1　4

乳橙・焦茶　×1.3
ヒメハラダカラ　1

ウラシマ　乳白・橙　×$\frac{2}{3}$　5

淡褐・白・茶　×$\frac{2}{3}$
リュウグウボタル　2

ヒガイ　淡桃・褐　×$\frac{1}{2}$　6

淡茶褐・焦茶　×$\frac{1}{3}$
イトマキヒタチオビ　3

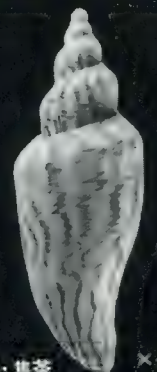
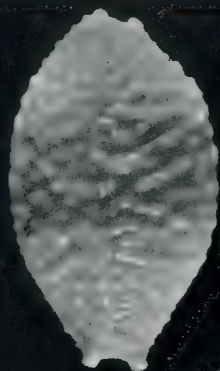
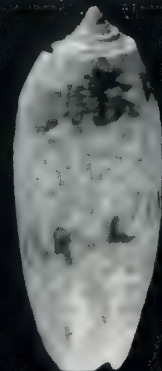
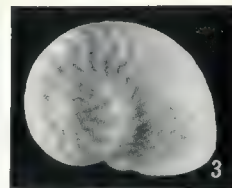
イボダカラ　白・淡茶褐　×2　8

ジュドウマクラ　乳橙・茶　×4/5　5

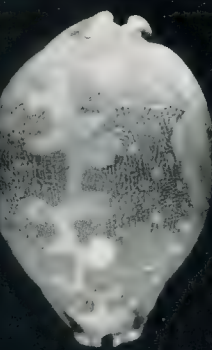
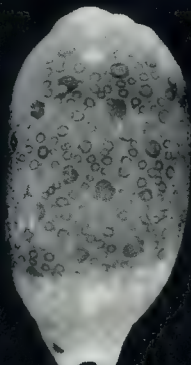
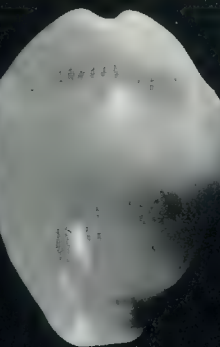
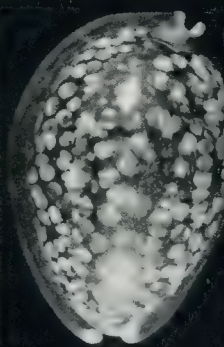
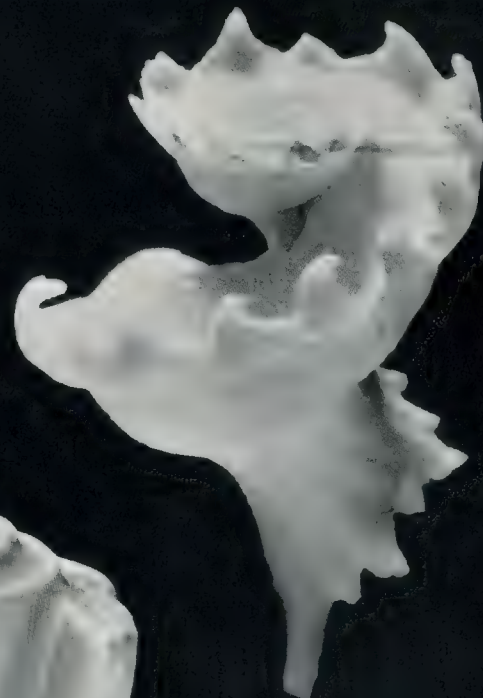
ハラダカラ　淡桃紫・茶　×3/5　9

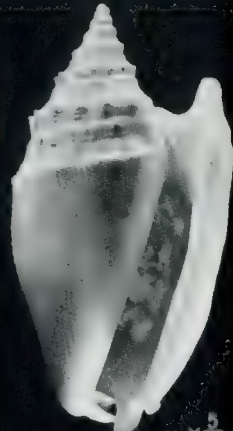
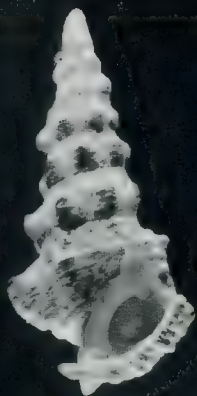
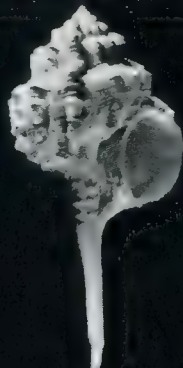
ジャノメダカラ　淡紫褐・茶　×2/3　6

キイロダカラ　黄　×1.5　10

ハチジョウダカラ　焦茶・淡紫　×3/4　7

モクメダマ　白・茶　×1　3

南の海の貝

光沢があり，色や模様の変化にとんだ枕貝や宝貝，模様のはなやかな芋貝，筍貝（たけのこがい），筆貝類，さらに袖貝，レイシ，日光貝の類，どれをみても南の貝は派手である．ハチジョウダカラは子安貝ともよばれ，昔から安産のお守りにされている．キイロダカラは古代の中國で貨幣として使われた．漢字の「貝」はもともと宝貝のことであり，金銭に関係する字に貝という字が入っているのもそこからきている．

シマガノコ　白・黒　×1.5　4

ミズスイ　白　×1.5　1

アコメガイ　純白　×2　2

フジツガイ　茶褐・白・黒　$\times\frac{2}{3}$　10

ジュセイラ　煤・濃紫褐　×1.3　7

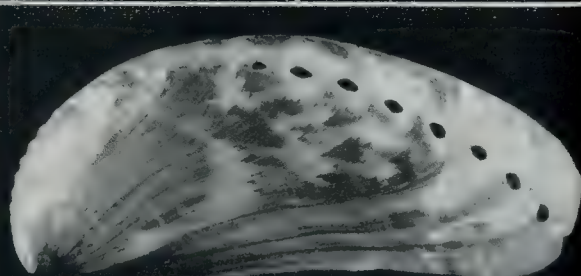
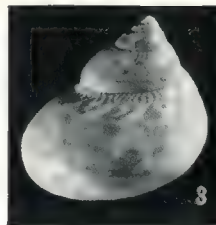
マイノソデ　白・紫褐　$\times\frac{5}{6}$　5

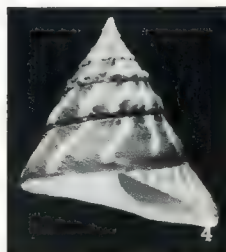
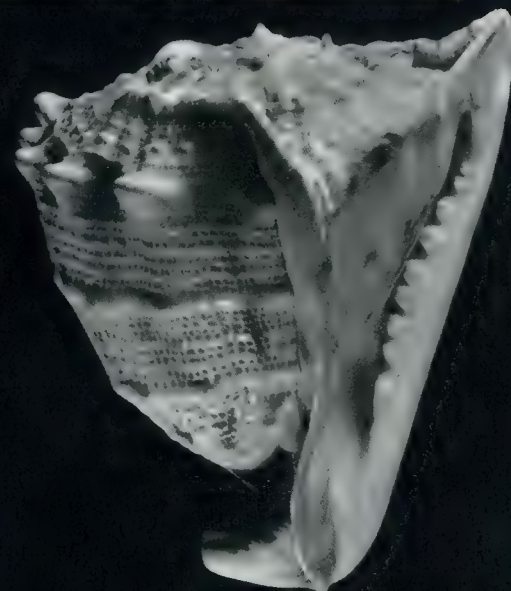
オニノツノ　白・焦茶　$\times\frac{1}{2}$　11

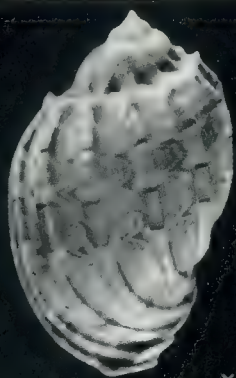
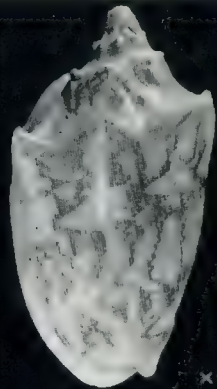
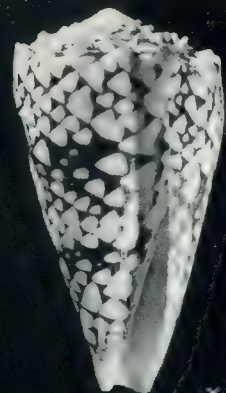
サツマツブリ　茶褐　（殻口内　淡赤）　$\times\frac{1}{3}$　8

イチョウガイ　白　$\times\frac{3}{4}$　6

ホラガイ　白・焦茶　$\times\frac{1}{10}$　12

ミミガイ　オリーヴ・鮮緑　$\times\frac{2}{3}$　9

リュウテン
赤褐・緑　$\times\frac{1}{2}$　3

サラサバテイは俗に高瀬貝とよばれ貝ボタンの原料になる．スイジガイはシドロの類で，殻口外唇から六本の棘のような突起が突き出し「水」という字のようにみえる．マイノソデはこれもシドロの類で，張り出した殻口外唇が舞姫のかざした袖を思わせる．山伏がふく法螺貝は琉球産の大きな種類で，内地産のボウシュウボラは玩具の笛になる．オニノツノガイは殻口外唇が突き出して水管と交叉してみえる．ミミガイはアワビの類である．

サラサバテイ
白・濃赤　$\times\frac{1}{3}$　4

トウカムリ　白茶　$\times\frac{1}{2}$　1

スイジガイ　白・焦茶　（殻口内　白・赤黒）　$\times\frac{1}{2}$　2

ショクコウラ　桃紫・白・茶　$\times\frac{1}{2}$　13

トウコオロギ　白・茶　$\times\frac{1}{2}$　10

コオニコブシ　焦茶・白　×1.5　7

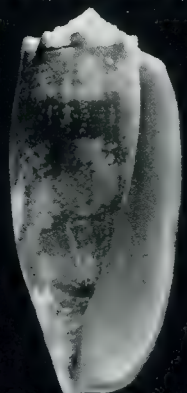
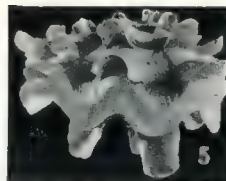
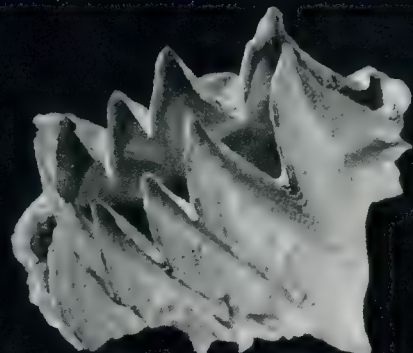
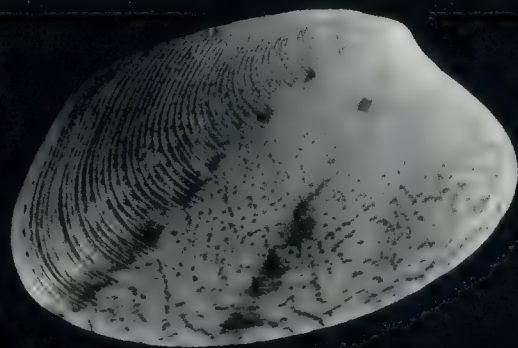
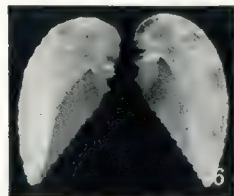
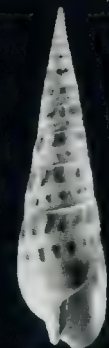
クロミナシ　焦茶・白　×1　14

アンボンクロザメ　白・焦茶　$\times\frac{1}{2}$　11

アンボイナ　白・茶　$\times\frac{2}{5}$　8

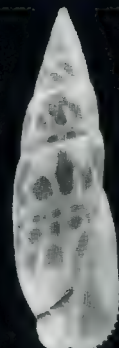
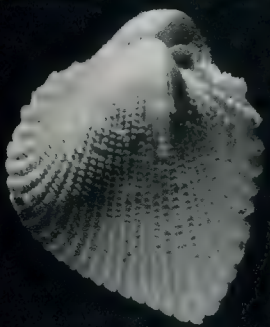
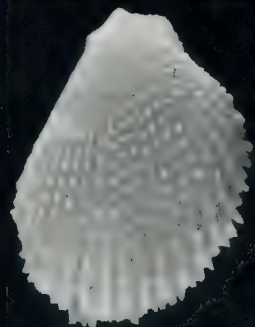
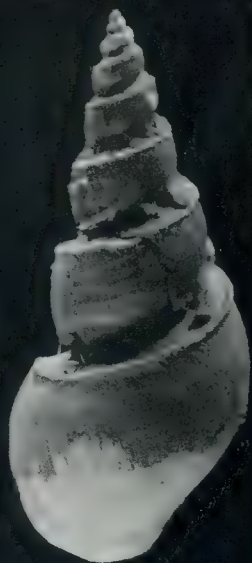
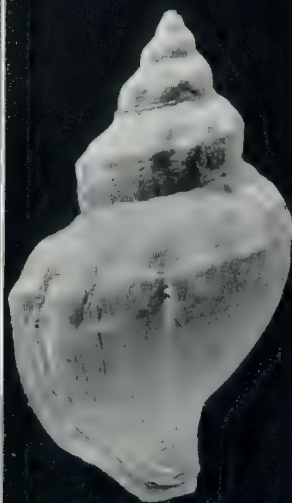
カワラガイ　淡黄・赤　×1　15

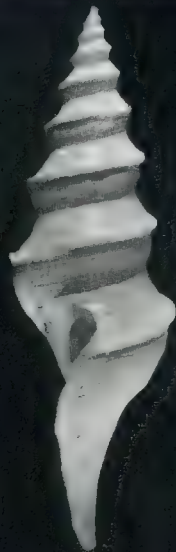
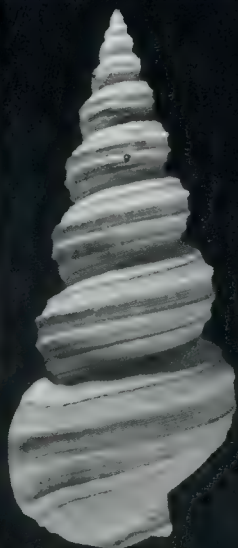
ミノガイ　純白　$\times\frac{1}{2}$　12

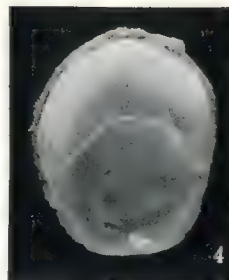
リュウキュウアオイ　淡黄　$\times\frac{3}{4}$　9

ヒレジャコ　淡黄褐　$\times\frac{1}{5}$　5

芋貝類は一般に口に毒腺をもっているが，アンボイナの毒はとくに猛毒で南方地方ではすでに何人かの人が咬まれて死んでいる．ヒレジャコの属するシャコ類は大きなものになると長さ 1 m，重さ 200 kg 以上にもなって，水盤などに使われて親しまれている．リュウキュウアオイは二枚貝の一種だが，ふつうの二枚貝が前後に押しつぶされたような，きわめて珍らしい形をしている．リュウキュウアサリは内地のアサリと同じように模様も変化に富み，食用にもなる．

リュウキュウアオイ　淡黄　$\times\frac{1}{2}$　6

トサカガキ　赤褐　×1　1

リュウキュウアサリ　黄・黒　×1　2

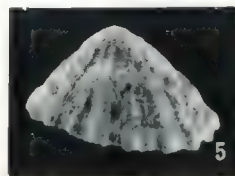
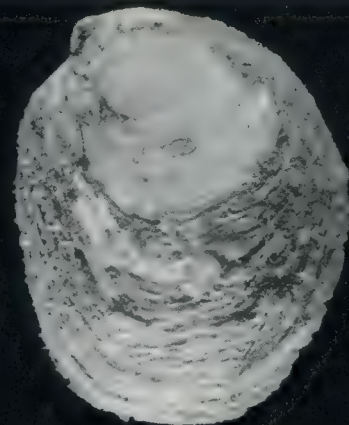
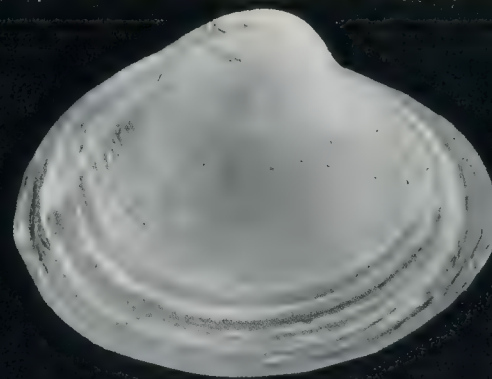
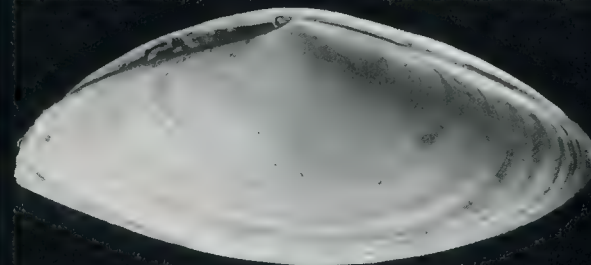
淡黄褐・焦茶　$\times\frac{1}{2}$
リュウキュウタケ　4

チョウセンフデ　白・橙　$\times\frac{2}{5}$　3

ネジヌキバイ　淡褐　×$\frac{3}{4}$　10

ヒメエゾボラ　淡褐　×$\frac{2}{3}$　8

オオエッチュウバイ　淡黄緑　×$\frac{3}{7}$　6

ヤゲンイグチ　淡橙　×$\frac{3}{4}$　11

シライトマキ　淡黄褐　×$\frac{1}{2}$　9

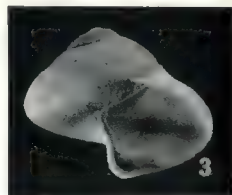
フジタバイ　白（殻皮　褐）　×$\frac{2}{3}$　7

エゾフネガイ（内面）
白　×$\frac{2}{3}$

北　の　海　の　貝

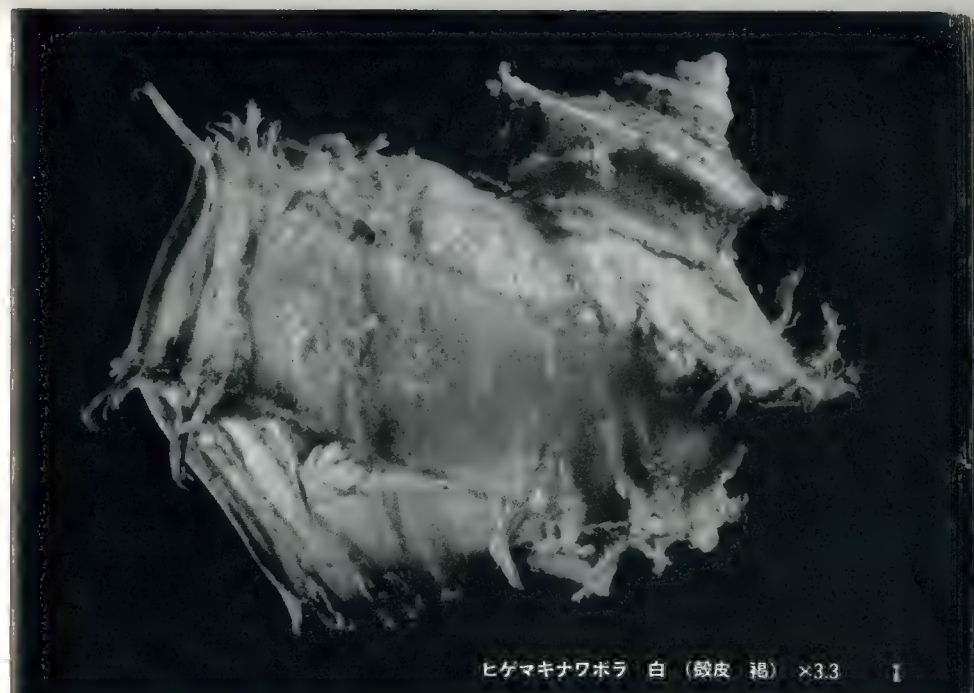
北の海で目につくのは巻貝ではバイの類，二枚貝ではホタテガイの類である．これらは種類も多く水産物としても重要である．富山湾ではばい籠(かご)を下してオオエッチュウバイのようなバイをとる専門の漁業がさかえている．バイの類はこの地方では高級な料理の一つである．ヤゲンイグチは浅い切れ込みをもちクダマキガイの類(15頁)．ウバガイは北寄貝(ほっきがい)ともよばれ食用になる．ホタテガイ(6頁)はイタヤガイと異り北日本だけでとれ左右の殻が共にゆるく彎曲している．

ユキノカサ　白　×1

エゾフネガイ　黄褐　×1.2　1

ウバガイ　淡褐　×$\frac{3}{4}$　2

サラガイ　白　×1　3

カメガイ類（背面）×3.5　4

ヒラカメガイ　白・紅　×9　5

クリイロカメガイ　茶　×10　6

アサガオガイ　菫青　×2

浮　游　性　の　貝

陸岸を遠く離れた大洋の表層や中ほどの深さの所には，硅藻などのプランクトンに混って小さな貝が浮游している．カメガイ類は浮游生活に適する翼のような足をもち，翼足類とよばれる．これは巻貝の一種でウミウシやヤカタガイの仲間である．貝殻はガラス細工のように透明で薄い．これらのカメガイ類は，ふだんは目につかないが，冬の季節風が強く吹いた後など無数の殻が浜に打上げられることがある．また深い海の底に，これの死骸が莫大な量で積み重なって泥のようになった所がある．それは翼足類軟泥とよばれる．アサガオガイは翼足類ではないがやはり浮游性の貝で，菫青色の殻からこの名がある．

ヒゲマキナワボラ　白（殻皮　褐）×3.3　1

エゾキンチャク　紅　×1　2

淡水の貝

日本は島國で狭く、琵琶湖以外には大きな湖もなく、また平野が小さくて河川も短いので淡水の貝の種類は多くない。現在知られているのは百種余りである。地方によって多少形が異ることが多いが、同じ種類が廣い地域に分布しタニシ、カワニナ、シジミ、ドブガイなどは殆ど全國にいる。中にはカワシンジュガイのように北欧、シベリアから北米にまで分布するものもある。また海水の混る河口や淡水のまじる海岸には、それぞれ淡水にも海にも見られない種類が棲む。淡水貝は食用になるものも多いが寄生虫を媒介するものもある。

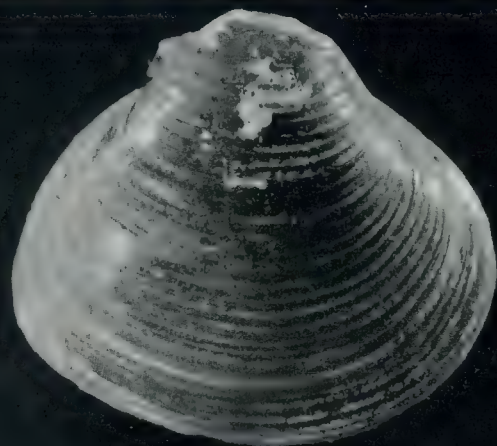
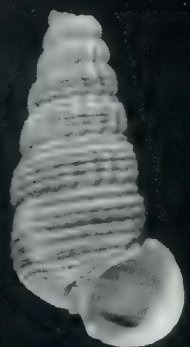
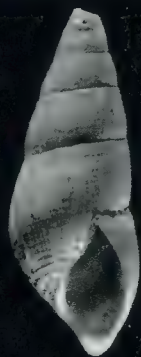
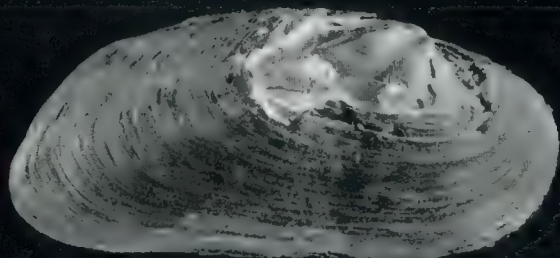
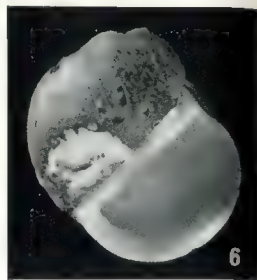
ドブガイ　黒　×$\frac{1}{3}$　1

マシジミ　黒　×1.5　2

カタヤマガイ　淡褐　×5　3

マルタニシ　緑褐　×2　4

ヒメタニシ　緑褐　×1　5

イシマキ　焦茶　×1　6

ヤマトシジミ　黒　×2.5　7

フトヘナタリ　黒・白 ×1.5　9

カワニナ　黒　×1.3　8

カワシンジュガイ　黒　×$\frac{1}{2}$　10

フトヘナタリは川口の葦原に，イシマキは川口の石や杭に棲んでいる．ヤマトシジミは川口に多く殻頂が高くて大きいので殻の形は円形に近い．マシジミは海水の影響がまったくない川の砂のなかに棲み，殻頂が低いので殻は三角形に近く，共心円状のあらい彫刻がある．カタヤマガイは日本住血吸虫を体内に寄生させて人に傳える．この虫からおこされる風土病は「片山病」といわれる．カワネジガイ(54頁)は日本と印度だけに分布する．カワシンジュガイは主として北日本の川に棲む．海産の眞珠がとれなかったヨーロッパでは，以前この貝から眞珠を採ったこともあった．これら淡水の貝は，ふつう多かれ少なかれ貝殻，とくに殻頂の部分がとかされている．

イケチョウガイ　黒　$\times\frac{1}{4}$　5

オオミガイ　淡褐　×4　4

セタシジミ（幼貝）オリーヴ　×1.2　9

セタシジミ（老貝）黒　$\times\frac{4}{5}$　6

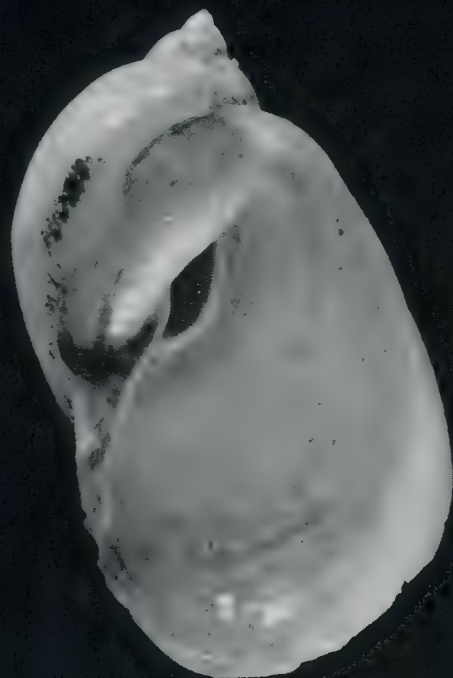
セタイシガイ　黒　×1.5　10

マルドブガイ　淡褐・濃青緑　$\times\frac{2}{5}$　7

ナガタニシ　緑褐　$\times\frac{2}{3}$　11

イボカワニナ　褐　×1.5　8

琵　琶　湖　の　貝

琵琶湖はわが國で一ばん大きな湖であるばかりでなく，その成り立ちが他の湖や沼とは非常に異っている．この湖に棲む淡水貝は約40種，その半数は二枚貝である．そのうち，この湖だけに棲む特産種が18種もある．ナガタニシ，イケチョウガイ，セタシジミなどは東南アジア系の貝で，また特産種の大部分は附近の丘陵地帯からも化石として発見される．これらのことは，この湖の古さや地質時代における日本列島と大陸との関係を知る一つの手がかりになる．ナガタニシは螺層が平たく螺塔に段ができるのが特長である．イケチョウガイは養殖眞珠の母貝になる．

モノアラガイ　淡褐　×4　2

カワネジガイ　淡褐　×10　1

カラスガイ　黒　$\times\frac{1}{2}$　3

ミカドギセル　淡褐　×4.5　2

コシボソゴマガイ　淡褐　×30　1

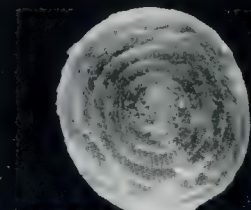
陸の貝

海や湖や川ばかりでなく、陸にも貝は棲んでいる。われわれがよく見かけるカタツムリは、殼をもった立派な巻貝である。陸の貝は、海の貝のように派手でもなく、また変化も少いが、種類も數も決して少くない。日本は地形が複雑な上、季候は温和で雨が多い。草木もよく生いしげっている。陸貝の繁殖にとっては、はなはだてきした土地なのである。わが國の陸貝は、大部分、中國東南部に棲む陸貝と同じ系統に属しているが、主体は日本列島で分化した特産種である。これに寒帯系のものが加わって、その種類はすでに記録されたものだけでも、七百種に及んでいる。陸の貝はこのように種類が多い。しかし、かわった形をしたものは少く、また全國的に廣く分布する種類も比較的少い。

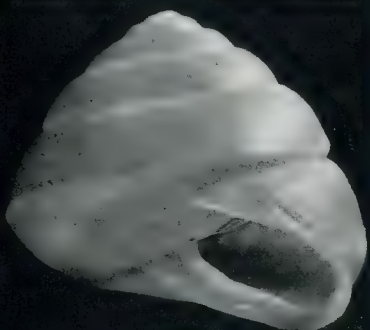
ヤマキサゴ　淡赤褐　×3　7

ヤマタニシ　淡褐　×2　4

3 ミスジマイマイ　淡黄・焦茶　×$\frac{3}{4}$

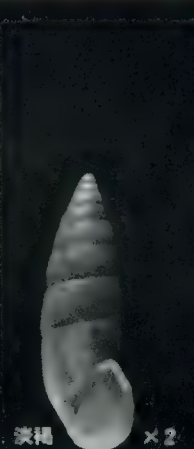
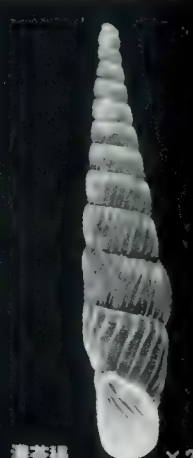
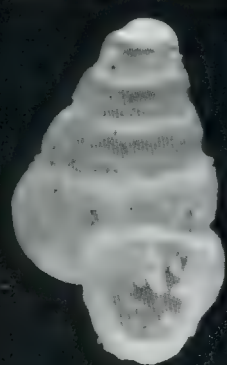
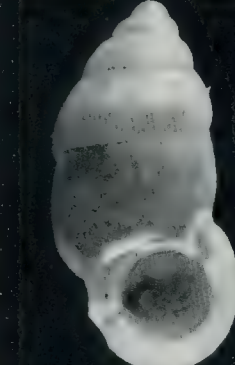
ヤマキサゴのふた　×6　8

ヤマタニシのふた　×2.5　5

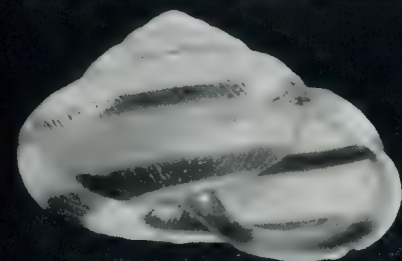
淡褐・茶　×2　オナジマイマイ（有帯）　9

淡褐　×2　オナジマイマイ（無帯）　6

ニッポンマイマイ　淡褐　×2.5　11

オオギセル　茶　×1　10

庭先や生垣でとれるカタツムリのほかに，濶葉樹や杉の林，とくに大樹の鬱蒼としたお宮やお寺の森などには，陸の貝がたくさん棲んでいる．けれども，それらは大てい小さな種類で，それを見つけるには樹の幹や枝はもちろん，落葉や朽木の間，樹の皮や石のしたなどもていねいに探さなければならない．陸の貝はふたのないものがふつうだが，少数の貝はふたをもっている．ヤマキサゴはアマガイなどに近い仲間で石灰質のふたをもち，ヤマタニシはタマキビやタニシに近縁で角質のふたをもっている．これらはともにカタツムリとは縁が遠い．オナジマイマイは東南アジアから世界各地に傳播され，日本でも各地に棲んでいる．その褐色の帯の有無はメンデルの法則に従って遺傳する．

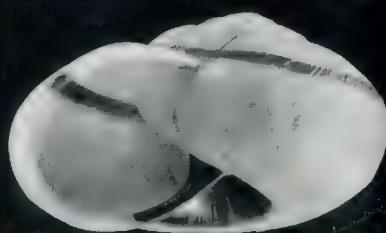
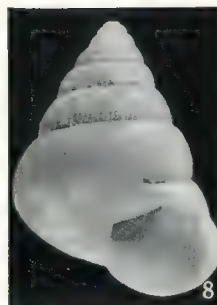
（折れないもの）（折れたもの）
シリオレギセル　淡褐　×2　11

淡褐　×2
キセルモドキ　10

濃茶褐　×2
タイシャクギセル　9

×20
クチマガリスナガイ　淡褐　14

アズキガイ　茶褐　×5　13

タワラガイ　白　×15　12

クチベニマイマイ　淡黄・黒　×1.7　16

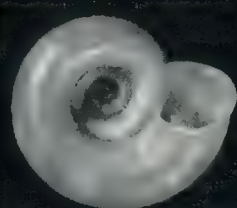
ヒダリマキマイマイ　栗色・黒　×1.3　15

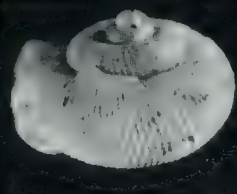
ケショウマイマイ
純白　×2

ミスジマイマイの類は日本の特産で，20あまりの種類があるが，形や色が少しずつ違うだけでなかなか見分けにくい．ミスジマイマイは関東地方ではごく普通だが，近畿地方では全く見当らず，その代りクチベニマイマイ等が棲んでいる．殻頂を上にして殻口が右にあれば右巻，左にあれば左巻である．左巻は種類こそ多くないが珍らしいものではなく，東日本にはたくさんいる．ムシオイガイは体層のなかほどに虫のような管が生ずるのでこの名がある．オオケマイマイは体層の周囲が角ばり，毛状の殻皮がつく．クチマガリスナガイは殻口内に多数の襞歯がある．一般に石灰岩の土地には陸貝の数や特産種が多い．

8

オオケマイマイ　淡褐　×1　4

オオケマイマイ　淡褐　×1.5　1

パツラマイマイ　淡褐　×4　5

ヤマクルマ　淡緑褐　×2　2

×1.5
ウスカワマイマイ　淡褐　6

ムシオイガイ　淡褐　×13　3

ベッコウマイマイ　淡褐　×4　7

タコブネ　白・薄墨　×1　1

オオムガイ　白・赤・黒　$\times\frac{1}{3}$　2

ナメクジ　薄墨　×1.5　3

クロシタナシウミウシ　黒・黄　×1.6　4

コウイカの甲　白　$\times\frac{2}{5}$　5

貝殻のない貝

貝類はもともと軟体動物なのだが、甲羅や骨に当る貝殻が目立つので、殻をつくった動物の方は忘れられがちになる。しかし生きている本尊は軟い肉体であり、殻は退化したり無かったりするものもある。貝類には、腹足、掘足、斧足のほかになお二つの種類がある。一つは磯の岩につくヒザラガイの類で、神経系が左右相称なので双神経類とよばれ、種類は少い。小判形で背中に八枚の板状の殻がある。もう一つはイカやタコのように口の周りに足のある頭足類である。コウイカはからだに甲をもちタコブネは雌の腕から殻を分泌するが、頭足類の多くは殻がない。ウミウシはヤカタガイの、ナメクジはカタツムリの同類である。オウムガイは地質時代に栄えたアンモナイトの近縁で頭足類である。

ヒサラガイ　灰褐　$\times\frac{3}{4}$　6

貝に似た動物

殻をもちながら貝とは全く異る動物群に属するものもいる．ヤエギクやホウズキチョウチンは二枚貝に似ているが，殻は左右でなく背腹に生じ，孔から肉柄が出て他のものに附着する．殻の中に腕のようなものがあるので腕足類とよばれる．ムラサキウニの殻の疣のような突起は棘のつくところで，棘皮動物といわれる．ヤドカリはエビカニの類で貝の空殻に宿る．アカフジツボもまたエビカニの同類で，甲殻類である．

アカフジツボ　赤　×1　7

ムラサキウニの殻　緑紫　×1.3　8

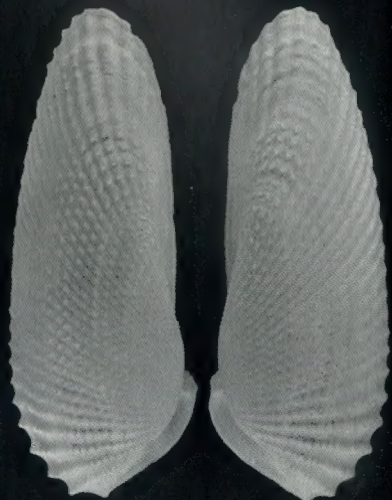
ヤドカリ　褐・青緑　×2.5　9

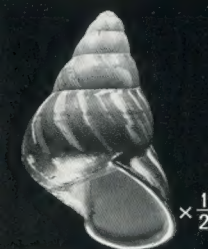
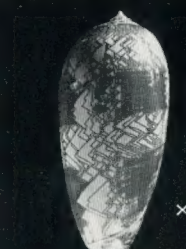
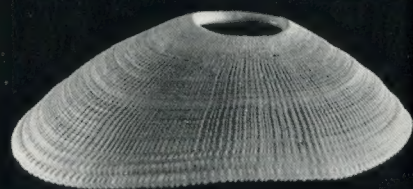
ヤエギク　赤　×1.3　10

橙赤　×1
ホウズキチョウチン　11

スカフェラ・ジュノーニア　白・焦茶　×$\frac{1}{3}$　9

キンビオラ・インペリアリス　白・茶　×$\frac{1}{4}$　7

ヘリコスティラ・インペラトール　紫・白　×$\frac{1}{2}$　10

オリヴァ・ポルフィリア　乳黄・茶　×$\frac{1}{4}$　8

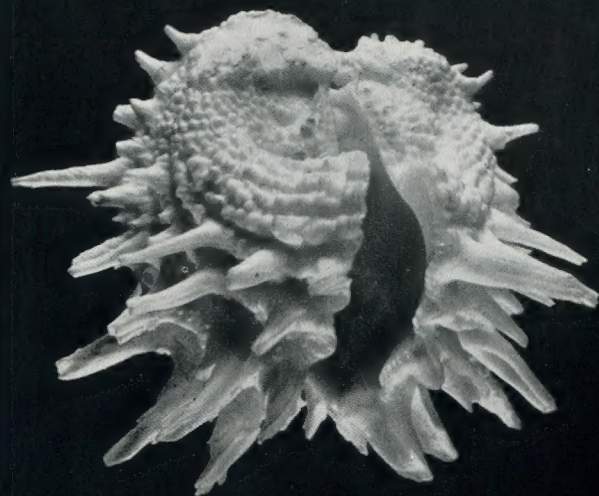
バルネア・コスタータ　純白　×$\frac{3}{5}$　4

ヴェルミックラリア・スピラータ　茶褐　×$\frac{1}{2}$　11

メガトラ・クレヌラータ　藤灰色　×1　5

スピルラ・スピルラ　白　×1.5　6

メガラトラクトス・アルーアヌス　乳橙　×$\frac{1}{24}$　3

外國の貝

外國にも，その廣い海や陸地に比例して，さまざまな貝が棲んでいる．熱帶の浅い海に棲む貝類の鮮麗な色彩と斑紋の複雑さ．深い海の貝の清楚な美しさ．また巨大な貝や奇抜な形の貝等々．ここでは各地の有名な貝のいくつかを拾ってみた．⑦⑨ヒタチオビ類はすぐれた形と斑紋，またその貝の数の少いことによって內外の蒐集家に喜ばれる．④は欧米で天使の翼とよばれる．③は世界最大の巻貝で60cm以上になる．①⑩熱帶地方の陸貝には殼の厚い鮮かな色彩のものが多く，美しく塗られた精巧な木彫細工をおもわせる．產地はそれぞれ，⑥南太平洋⑩比島⑦東印度②④⑨⑪米國フロリダ①西印度③濠州⑤米國加州⑧中米太平洋岸である．

ポリミタ・ピクタ　鮮黄・墨　×2.5　1

エキノカマ・アルキネラ　白　×1.6　2

この本に載っている貝の和名と索引

サザエ（ボタンを抜いたあと） ×1.2

ホンカクジヒガイ　純白　×2
ハグルマミズスイ　純白　×3
シモオキザル　白　×1
ユメハマグリ　白　×4
オオイトカケ　小麦・純白　×1.5
日本の貝殻
99
¥ 100